第９章　水場「石船（いしぶね）」名称と形と向きの不思議

この場に初めて向き合った時、次のような率直・素朴な疑問が湧いた。

川・河・海がなく舟・船とは縁もゆかりもないこの山奥の山道の尾根筋の水場になぜ「船が付く名称」なのか？　水場といえども、水量豊富に流れ出るという所では無いのです、そこに舟です。どう見ても「船を浮かべる、浮かんだ船」を観想出来る地理・地勢ではあり（N）ま（o）せん（n）。そこに舟形をなぜ？？？

そして、

例えば、弘法大師像や不動明王（不動尊）では無く、なぜ水受けとしたのか？

例えば、水受けでも丸形・四角型では無く、なぜ舟形（楕円形状）としたのか？

例えば、金属製や木製では無く、なぜ石造物としたのか？

例えば、他の水場では無く、なぜこの場所でなければならなかったのか？

例えば、水流の向きに沿わせるでは無く、なぜ 45 度斜め向きに置かなければならなかったのか？

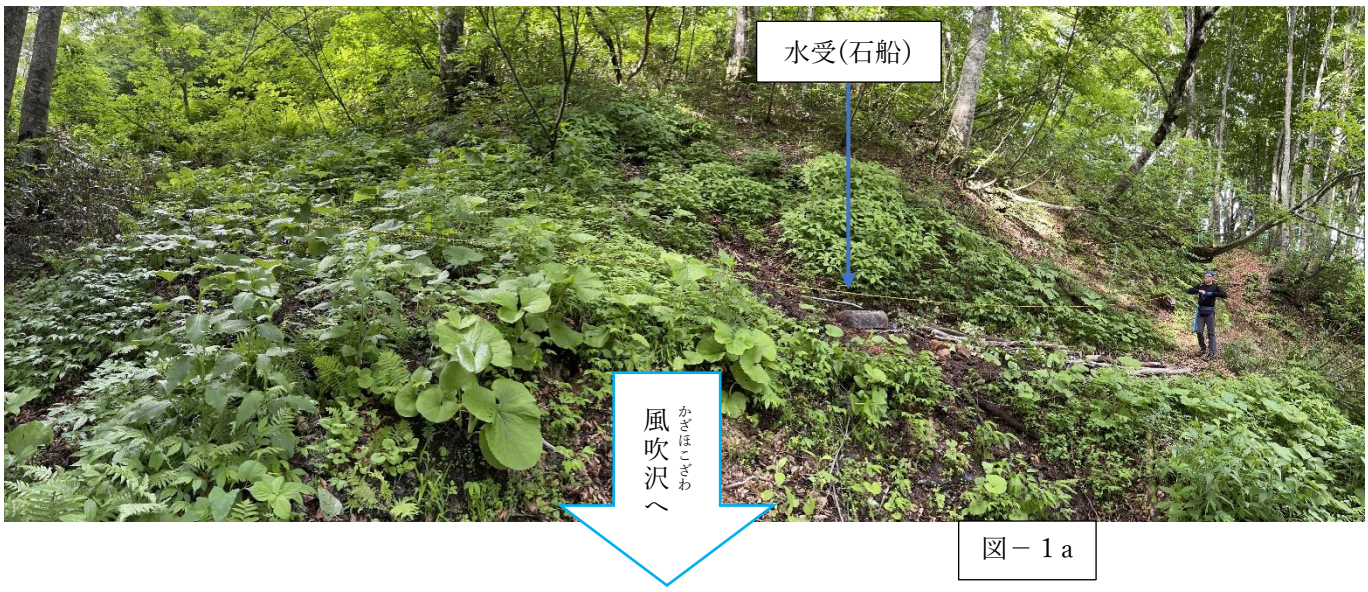
そもそも、これは寄進奉納されたものであろう（確信と期待）が、真相はどうなのか？

今となっては想像する他はないが、それらの意味合い・背景を探る。

Ⅰ部　刻字発見

１．現地の特徴

「高清水通り」には、四季を通じて枯れることのない水場が、夫婦清水（みよとしず）、この『石船』、高清水、サカサ清水の４個所（**飲水は自己責任**）あり、その中で、『石船』と名付けられた所は起点から約5(4.9)km、図－1のとおりである。融水点一帯には樹木は生えず膨らんだ腹の様な地形でミズナの宝庫である。夏場は一帯からプチプチと水が染み出る状況にある。年中一個所（図－１c）からチョロチョロ、しかし、途切れることなく湧き出て、その下に水受け用として舟形の石造物が置かれている。



図－１a

群生するミズナからポタポタと滴る水玉はイクラの卵が弾ける様相である。それらの湧水状況と地形からして何かジェンダー（女）性と関係あるのではないかと直感する。ちょろちょろではあるが、もの

図－１b

図－１c

すごく大きな仕事をしているのではないかと直感した。また、初めてこの地に向かい合った時、この地中には月山山系から供給されている伏流水の大きな貯水槽（地下溜池）があって、それを母親の母体（胎内）と見做し、母胎から沢山のあかちゃんが生まれて来る状況を想起した。

２．水受け石造物初調査

（１）経緯

私はかねてより、この異様と思える、奇異に見える舟形石造物（『石船』の名称はここでは仮置き）は寄進されたもののはず、寄進奉納者がいるのではないかという直感を持っていた。また、設置年代がとても気になっていた。正面の見える側、下流側から見た分においてはコケが生え刻字されている様子はなく、また、裏側を確認したく一度一人で動かそうとしたが重く調査を断念していた。周囲の人達からは“何も書かれていないのではないか（書かれている訳がない！）”と言う意見が全てであった。従前の正面は結果して非刻字面であったことからは一見何も書かれていないと見るのは至極当然のことであった。しかし、私はとても気になっていた、諦め切れなかった、何か書かれていると確信していた、こんな奇妙なものを人里から約５km も入った山中に置いたからには、私は直感、人間の意図を読み取った。しかし、疑いつつもこれを知ってから約１年近くは放置してしまった、

（２）刻字発見

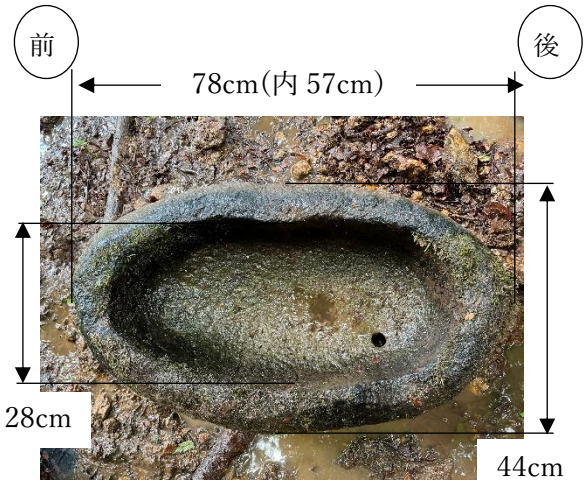
そこに阿部剛士さんという助っ人・相棒が表れた。

調査したい旨を相談したところ一発回答“ｏｋ”であった。**2023(R5)年６月 19 日（月）午前中**、初めて二人で石造物の刻字有無調査に入った。当然ながら予めコケ落しのための金刷毛を持参した。正面（谷側）のコケを落としたが何も刻されていない。手前に少しずらして谷側に隙間を開けた瞬間に刻字に気付いた、私の予想とおりに**文字が刻されているのを新発見・初検証**したのだ。驚くと言うよりも“やった！、やっぱり！”とつぶやいた。後記するが 35 文字ほどで一部（下部）に明瞭な朱色ベンガラが残っている。しかし、ぬかるんで足場が悪いことから簡単に向き変更が出来ず、全部を読み切れない

ことから翌々日６月 21 日（水）再調査した、この日は**夏至**であった。なお、後記のとおりに設置月は旧暦５月で新暦は６月であることからは同じく夏至月であった。

全体形状は図－２～４のとおりである。

<table>
<tr><td rowspan="2">刻字面（立てて上から見た）</td><td colspan="2">

刻字に朱色ベンガラが一部鮮明に残存</td><td rowspan="2"> 
</td><td rowspan="2">上からの状態</td></tr>
<tr><td rowspan="3">刻字がある面</td><td>
</td><td>
</td><td rowspan="3">刻字と反対面</td></tr>
<tr><td>元は（調査前は）こちらが裏面(山側)</td><td>元は（調査前は）こちらが正面(谷側)</td></tr>
<tr><td>6/21 以降は正面(谷側)</td><td>6/21 以降は裏面(山側)</td></tr>
<tr><td colspan="4">図－２</td></tr>
</table>

○当初の設置状況は、図－３のように、非刻字面が正面を向いて、刻字面は山側向きに設置していた。つまり、水を汲む人からは字が見えなかった。後記の銘文を以ってしては、全ての親族縁者のみならず、縁の有る無しに係らずみんなの幸せを願っている訳だから、何もやましいことはないはず、むしろ、読んで貰いたいというのが本心のような気がする。すると、後で向きを変えたのか？　（いや、胴抜きの位置からは当初からこの設置であったはずである。）しかし、**後記するが、これにはそんな疑義は当らずにして、明確な奥深い理由があることが分った**のだ。

○周囲からの長年の土砂の流れ込みで殆どが埋まった状態にあった。

○水槽部清掃用に水抜き穴（胴抜き）を開けている。

○越水用の切込みを入れ、その下に縦線を刻んでいるが、おそらく、溢れた水が垂直落下するように、つまり、周りに散らばらないように工夫したということだろう。（最初は蓮の飾りかと期待したが、そうでは無かった。）

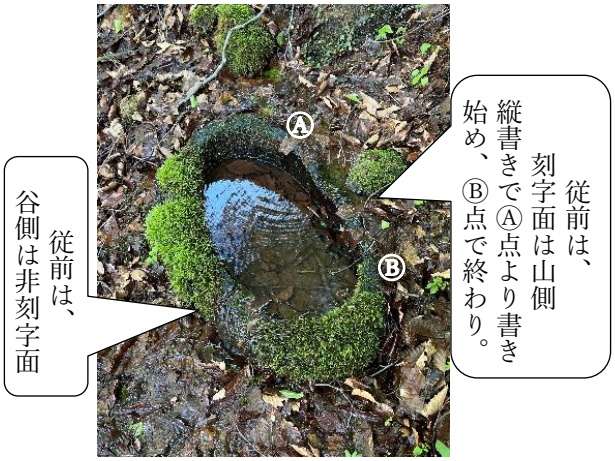
○誠心誠意、精巧に製造した石工の心意気が伝わって来る。

本体には「舟、あるいは、船」の刻字はない。

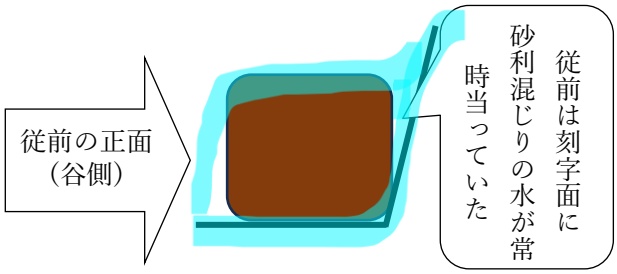
当初の正面

当初の平面

図－３



図－４ａ



図－４ｂ

．応急整備

二人で出来る範囲で行った整備状況は図－５のとおり。細い塩ビ管（外形 18mm×約 1m）を差し込み、水を誘導し、水場らしくなった。本通り道からここまでは約 15m あり、降りて行くには少し急なので足場に切り込みを入れてロープを張った。水受けに至る直近がぬかるんでいることから、いずれは土嚢を敷き詰めることに計画した、(その後実施した)。

向きを変える作業

水場らしくなった

手前足場

ロープ取付点(手前)

図－５a

また、右図のとおり塩ビ管が簡単にずり落ちないように被覆銅線を巻き付けてドライバーで地面に固定した。

図―５b

II部　刻字解読

１，水受けの刻字解読

刻字面は図－６のとおりであるが、当初の設置は前記のとおりに刻字面は山側向きで水が常時当っていたことから、特に上の横１行が他と比べ摩滅が進行し読み難くなっている。刻字と睨めっこ、想像力を動員し、現地で一部を除き殆ど銘文の刻字解読に成功した。うれしくてうれしくて小躍りした、感無量となった。分らないものは・未確認の事物は真偽のほどにおいては五分五分であると普段から基本的考えを持っている者としては、直観が真に当ったのだ、真に的中したのだと率直にとても喜ばしいと思った。

図－６

後刻、不明な一部については、他でも協力を賜った山形市市村幸夫さんからヒントを頂戴し、全部を読み切った、その結果は図(表)－７のとおり、全35文字である。**何と寄進者がいたのだ、寄進されたものであると判明したのだ。施主は山形市八日町の人であることが判明した。**故人、あるいは今世の人

達に対する幸せメッセージである。最初の 12 文字からは利他性の高尚・崇高なメッセージが伝わって来る。**設置（寄進）年は正徳六年、西暦 1716 年だから、姥像等石碑群にある享保六年（1721 年）の「祖母神」像よりも５年も古いものであることが分った、本通り沿い設置の石碑・墓石・丁石において一番古いもの**となる。

―――	12	11	10	09	08	07	06	05	04	03	02	01
	敬白	丹羽氏	住人	形八日町	施主山	五月日	丙申年	正徳六	菩提也	縁無縁	眷属有	為六親

為六親眷属
有縁無縁　菩提也
正徳六丙申年五月日
施主　山形八日町
住人　丹羽氏

全ての親族縁者（※）や家来、ならびに縁の有る無しに係らず故人みんなの霊魂が「悟り」を得られ成仏出来ますように冥福を祈るものです。

設置（寄進）年の正徳六年は丙申（ひのえさる）年、西暦 1716 年の旧暦五月（新暦六月の夏至月）です。

施主は山形八日町の住人「丹羽」という者です。

右のとおり謹んで申し上げます。（謹んで寄進奉納致します。）

（※）六親は、父、母、兄、弟、妻、子。または、父、子、兄弟、夫、妻など親族の全てを指す。

図(表)－７

２．寄進者の身分と奉納目的

昔の人々は、もちろん修験者や山師（鉱山師）は、干支はもとより、易経や陰陽五行や陰陽道に非常に関心を持っていた。吉凶判断・祭り・行事・冠婚葬祭や、建造物の着手・完成時期の設定など、日常生活の切り回し、産業その他諸々の節目・記念日の設定などに深く根付いていた。今の世では迷信・俗信のたぐいと無視しがちだが、昔は天地人の運行を論理付ける思想の一面として駆使したのである。私は少しかじっただけだが貧脳を使って考察する。

（１）設置年月の設定意図

あえてこの年月を選択したということだから、設置年月の正徳六年の干支丙申（ひのえさる）五月がとても気になる。石造物が余っていたからとか、何となく出来上がったからとか、何となく人手の都合が付いたからこの年月にした、この形のものにしたという安直なものでは無いはず。寄進者は崇高な思いを傾けた、託したはずである。綿密な思慮・企図の元に最も相応しい形と時期を探り、意図して決定したということであろう。

図(表)－８abcd を参照のこと。

○１；十干の「丙（へい）」（火の兄、ひのえ）は、炳（あき）らかで、横に燃え広がる、草木繁茂して明らかになる状態をいう、陰陽五行の「陽・火性」を有する、自然界では太陽（日）を象徴する。

○２；十二支の「申（さる）」は、呻（うめ）くで、万物が成熟して締め付けられ、固まって行く状態をいう、陰陽五行の「陽・金性」を有する、自然界では鉱物を象徴する。

○３；また、（旧暦）五月は五行の火気（陽・火性）であり、かつ、夏至月である。夏至は昼が一番

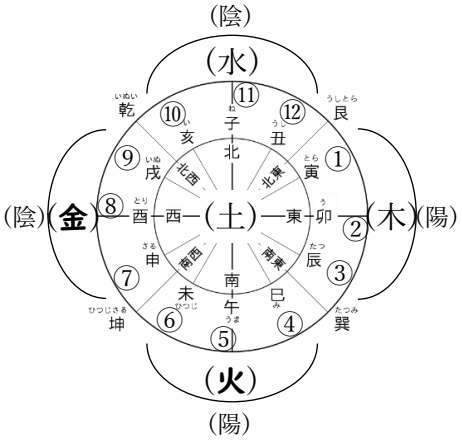
長く、商売・労働時間を一番長く取れる。太陽の恩恵に感謝大感謝である。

十干		五行	十二支	
陽	陰		陽	陰
甲	乙	木	寅	卯(う)
丙(へい)	丁(てい)	火	午(うま)	巳(み)
戊(ぼ)	己(き)	土	辰(いぬ)・戌	丑(うし)・未(ひつじ)
庚(こう)	辛(しん)	金	申(さる)	酉(とり)
壬(じん)	癸(き)	水	子(ね)	亥(い)

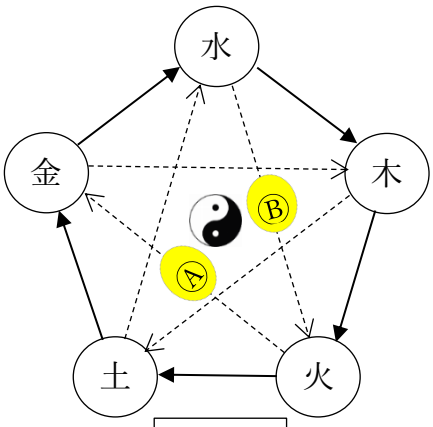
図(表)－８a

この三つが合わさると陽気が三重奏、「物事が大きく進歩発展し、成熟する年」の期待感が高まり、活動性が増進する、良いことづくめで大吉・大歓迎と納めたくなる。しかし、他方で、陽性が重なることからは、過剰に移行――『過ぎたるは及ばざるが如し』のとおり「何事もやり過ぎることは、やり足りないことと同じくらい良くない」、対立的過激から暴走への懸念を惹起する。また、五行説「火剋金」の関係性から内輪もめの憂慮をも招く。要は慢心・自惚れに傾く恐れ十分に有りなのである。きちんと「もの・こと」の自然原理を理解している人はここ（陽性が重なるほど）に警戒感を持ち、調和を模索する。平和は調和を求め、調和こそが平和を齎す。

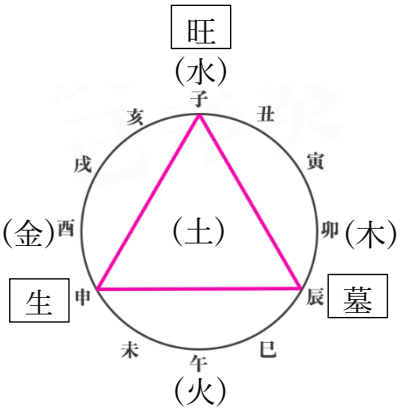
すると必然的に「水」を求める、何事も陰陽のバランスこそが正常・健全な発展を促すものだ。逆説



図－８b



図－８c



図－８d

的には、何事も陰陽のバランスこそが正常・健全な発展を促すからは必然的に「水」を求める。

図－８c の陰陽五行説元素モデルにおける相生・相剋関係は矢印の向きにあり、火を中心に金の関係を見る、「Ⓐ火剋金」（火は固い金を溶かす）であるから、鉱物類を自由自在に溶かし鋳造を操りたい、となればこの力「火剋金」を期待する。他方、過度な火の勢いは困るので乱暴な振る舞いを調節する力が欲しくなり、そこで火を諫める「Ⓑ水剋火」の力に期待する訳で、「水」が必要になる。

また、戻って、「申」に配当する易経六十四卦は通称「天地否」䷋の内卦（下）が坤(こん)、外卦（上）が乾(けん)で構成されおり、純陽☰と順陰☷で表すことから、「乾坤(けんこん)」すなわち「天地」を象徴する卦（記号）となっている。よって、「申」は陰陽（火・乾とこれに対する水・坤）のバランスの内包を意味する。既に水性を含んでいるとも見做せる。乾(けん)は天空、君主・男性を意味し、坤(こん)は、大地、皇后・女性を意味する。よって「申」の中には**男女交感交合の相が入っているのである。**

さらに、図－８d 五行説「三合の理」――何事も生に始まり、旺盛に成長し、やがては死に絶え墓に入る――の視点からは、水気の「三合の理」では、**「申」を生**とし、子を旺とし、辰を墓として成立する。「申」は既に水気を含んでいるとも見做せまる。さらには、石造物であるからは元々金気を内蔵している。

私はこれらから重要キーワード「火と水と金属・鉱石」のキータームム三点セットが浮かんだ。この三

つに格別の関心を寄せる生業として鍛冶職人（鍛冶屋・鍛冶師）、あるいは山師（鉱山師）、はたまた、先達を直感・想起した。相手とする**金**物（鉱物）に対して自在な操り、匠の技の発揮、事業化を図るためには相対(待)陰陽二元の**「火と水」が不可欠なもの**となる。先達に対する着目は、修験者は鉱山開発と強い結び付きの一面があったことを踏まえたものである。本件課題の当地には、目前の湧き出す水量は僅かでも年中枯渇を知らない水は貯水となって豊富にある。以ってそれら生業と結び付ける前提においては、必要十分条件は完備である。

しかし、この段についてはもう少し考察を深堀りする必要を感じる。

（２）本通りとそもそもの縁・関係性

ここでは簡単に触れる。

ａ．鍛冶職人との繋がりへ

代々親族縁者の月山・湯殿山への参詣に当り、鍛冶職人がおり、高清水通りを歩かせて貰った中ではここは貴重な水場だったことだろう。当該地は起点（旧本道寺）から約 5(4.9)km の所、天和三（西暦 1683）年には既に小屋掛けしていた古来の高清水（今でいう元高清水）までの距離約 10.5km のほぼ(※)中間地点であり、かつ、標高的には当該地は 1,050m で月山 1,984m のほぼ半分である。本通り長丁場の中で重要な節目地点の水場・休憩の場であったのである。この膨らんだ腹と思わせる地形から染み出る美味しい水から助けられて来たことに対する感謝の念があったのだろう。　（※）九十六丁の理論的中間は四十八丁であり、この丁石は現地においては当地石船より少し先の実測約 5.4km の場所にある。

ｂ．山師（鉱山師）との繋がりへ

後記するが、この水場の水は風吹沢（かざほこ）に流れて行く状況にあり、その上流域に文化十一（1814）年頃に「船ケ沢鉱山」開発の動きがあった、本件水受け用舟形石造物の寄進はこれよりも 98 年も前であり関係なさそうであるが、広域的な鉱山に注目すれば無関係とは言い切れない。なぜならば、ここで細部には触れないが、葉山から月山にかけての山岳地帯・烏川（銅山川）流域には有名なものだけでも永松鉱山（慶長十六・1611 年）や幸生鉱山（天和二・1682 年）が開発され、無名なものも含めこの一帯は山師（鉱山師）から大注目された歴史がある。鉱物資源を求めて正徳六（1716）年頃には既に山師（鉱山師）が本通りに出入りしていたことは、間違いないと推測している。

ｃ．先達との繋がりへ

山形八日町界隈は鶴岡と結ぶ六十里越街道の一方の起点であり、湯殿山信仰行者宿（指定宿）が立ち並んでいた一大拠点（地域）であった。するとここに住んでいた里先達ということも十分に有り得る。

（３）二つの間接的側面（時代背景）

ａ．西川町史編集資料八号（一）40 頁に記載図(表)－9のとおりの旧本道寺全焼との関係は有りや否やである。火災は言うに及ばず、火と水の競合に係る負の側面、火と水の剋し合いに繋がる事象である。大参事である、悲しい出来事ではあるが、再建に向けて関係者一丸となって叡智を絞ったことだろう。そんな中で本件奉納の正徳六年はこれより足掛け 4 年後の 1716 年である。前記した「陽気が三重奏」からは、早期に復興して欲しい、復興に協力するという意思が感じられる。しかし、あくまでも陰陽のバランスである。お世話になっていた本通りの中で格別の美味しさを感じていたこの地の「水」を寄進の動機に引き込んだということだろう。火防の願いをも込め、年中涸れることの無い確実な水場を模索する中でここだと決めたのであろう。

「本道寺焼失報告書(正徳二年十一月)」　解説

正徳二年(1712 年)十一月二日本道寺六坊残らず、並に弥陀堂・拝殿と合計拾八軒焼失した。火元は泉識坊で、住職は山をさまよって居りますという。白岩代官宛に報告した下書である。

拝殿と本殿とは同Ｉ建物であったと見れば、**本道寺全焼**と見る事が出来る。

梅本坊　四間はりニ拾弐間	源我坊　六間はりニ拾四間半
宝蔵坊　四間はりニ拾三間	三光坊　四間はり二拾壱間
西蔵坊　四間はりニ拾三間	泉識坊　五間はり二拾四間半
弥陀堂　三間四面	拝殿　我間はりニ三間

図(表)－９

ｂ．後記図(表)－24 に書いたが、この火災の翌年の正徳三（1713）年一月十八日、最上出羽守義光（でわのかみよしあき）の百年忌に付き、二晩三日の法要を斎行したというが、これに対する賛同の意味合いもあったのかもしれない。「本道寺（口之宮）湯殿山神社　署（略）沿革」によると、慶長二（1597）年、山形城主最上義光（よしあき）公が十一石の土地を同寺に寄進したことと、**山形八日町を湯殿山参詣宿泊者の定宿に指定した**ことが記述されている。これらから数年後の正徳六（1716）年の出来事である、たまたま本道寺全焼という凶事（大参事）と義光（よしあき）公百年忌という慶事が重なったのである。吉凶相合わせて騒然となった後の落ち着きを取り戻しつつあった時代である。そんな中で、吉凶を問わず本道寺に恩返ししたいと強く念じた人が表れるのも自然なことだったであろう。

Ⅲ部　設置場所の意味合い

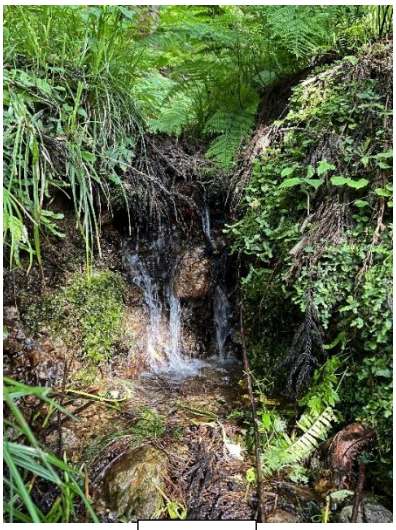
本通りに名称付けの水場は４個所ありながらも、ここだけに「石船」を当て、水場としては同じ状況に見える他の３個所（前夫婦清水（みよとしず）、後高清水、サカサ清水）は適用外とした理由について考える。

１．他の水場との違いは

前者は図－10a のとおりで、上流部に湧出点が二つ並んでおり、それが一つになって水が確実に流れている。

後者は同図 b のとおりで、溝に滝状の細いが水が確実に流れている。

大きな違いは、水は流れているものの、両者は汲み取るそこが湧水点では無いということである。ところが、石船の水場は汲み取りする水受け置き場の周囲一帯が湧水点という点である。　つまり、飲むための水を汲み取りするその点が湧水点なのか、そうではなく、どこか分からない別の湧水点から流れ来るものなのか、との違いが、左右したということなのか？



図－10a

図－10b

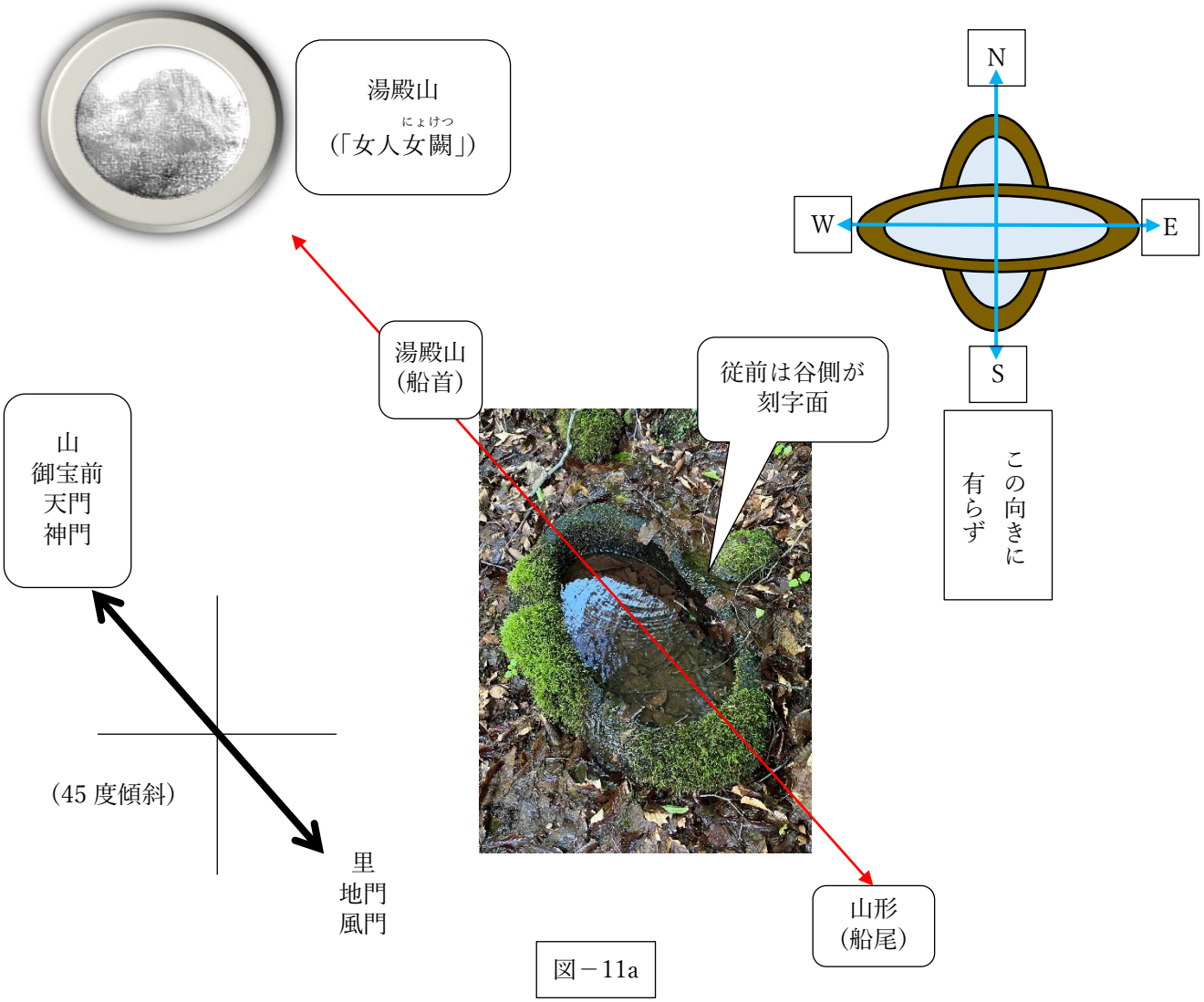
結論的にはずばり、**水がプチプチと湧き出る源（みなもと）に、子供（胎児）が生まれ出る源と重ねたということだろう。**この見方を根拠付ける事由について追々記述して行く。しかし、後記するが、場の選定に影響した（与えた）事由は、水の出方の違いでは無いということが分って来た。

2．特別な位置と向き

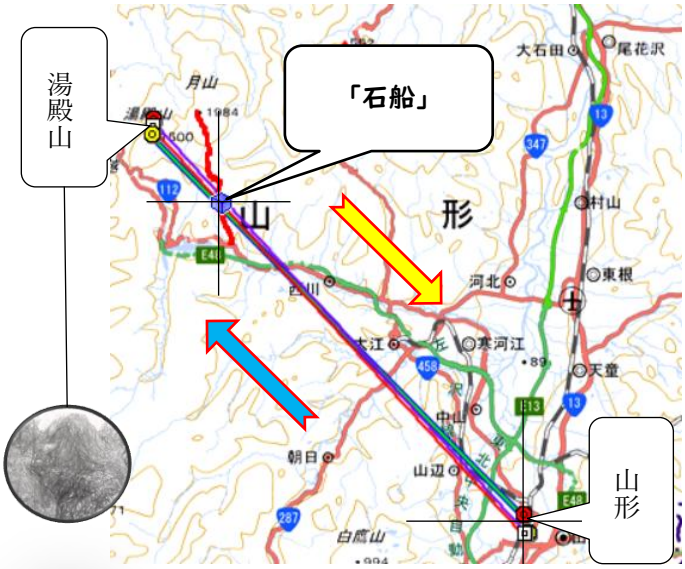
初めてこの水場に来た時に、奇妙な形の違和感もあったが、もう一つ、設置した向きにも同感を抱いた。この当地の舟は重力に沿う水流れの垂直方向に向けたのでは無く、また、横向きに置いたものでも無く、コンパスを当てた上で、北西－南東向きに斜め（45 度傾斜）に置いたということに気付いたのだ。

（1）図－11 を参照のこと。向きからは湯殿山を強く意識したのだろうと直感した。

ここの設置位置とそこにおける舟の向きと、本通り参詣者の最終目的たる湯殿山と寄進者住地山形八日町との方角相関がとても気になった。国土地理院地形図上において湯殿山側は山の湯殿山と御宝前の当たりを、山形側は山形城と八日町誓願寺の当たりをチェックポイントにそれぞれを直線で結んで見た。

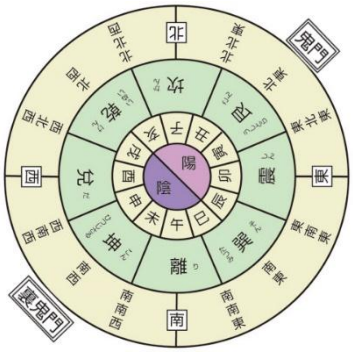


図－11a

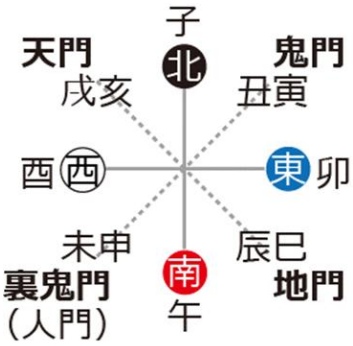


図－11b

図－12a は https://kotobank.jp/word/より、同図 b は https://sarumeigaku.com/sarukoblog/より、同図 c は http://trine-kansai.com/blog/12871 より引用したもの。この舟の向きは風水思想においては北西（＝天門）と南東（＝地門）の関係にある。舟の形状において、前と後はどちらかということもあるが、どちらが後先にせよ、当地はその直線上の一点を占め、舟（船）の向きは後述するが、実際は船首（舳先）が湯殿山を向いている。本件においては幸いにもほぼ**真正な－45 度方角の**北西～南東の関係にある。九星気学で北西は六白金気といい太陽を当て、天と讃（たた）え、神と称（たた）うる方角エリアであ



図－12a



図－12b

図－12c

る、大日如来の座（おわ）す湯殿山御宝前とぴったり重なる。北西は土用から水気、陰から陽へ、南東は土用から火気、陽から陰への変わり目である、陰と陽、水と火は対極にあるが、ある面では打消し合う中和化の動きである、落ち着き、平穏を求める願いを託すようにも読み取れる。湯殿山御宝前のふくよかな腹似と当地の腹似地形では共通、御宝前・火に繋がる熱いお湯と、当地冷たい水の結びにおいては対極的な陰陽相対(待)調和の相を喚起する。陰陽五行節で金と水は「金生水」の相生関係にあるが、「水剋火」（水は金属を錆させる）も裏に秘蔵している。　重力に従う水の流れを強く意識するならば南北方向に、あるいは東西方向に設置しても良かったはずです、しかし、そうはしなかったのである。

（２）刻字面をなぜ、山側にしたのか。この命題を解くには二つの鍵が直感で浮かんだ。日本語縦書きは右から左に進める約束事があることと、舳先（船首）を湯殿山に向けることの二点があったものと推考出来る。さらに展開するために図(表)－13 が浮かんだ。船舶法施行細則は現代のものであっても、縦書きの漢字・日本語にあっては昔からこのとおりであったろうと考える。

船名を書く場所は船舶法施行細則に定められており、船名文字は船首両舷及び船尾に書く。また**船首の右舷側のみ文字の配列を船首から船尾方向に読めるようにするため日本語文字を右から左へと書くのが一般的**(併記する英語表記は左から右のまま)。

（言い換えると、縦書き文字で向かって右から左に書き進むならば、書き始めが船首方向となる。）

図(表)－13

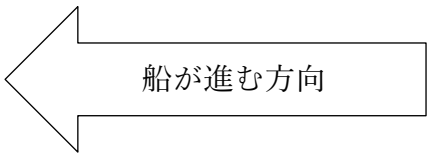
整理すると図(表)－14のとおりで、谷側に文字を刻する（書き込む）ことは不正常・不適切ということだったのだろう。どうしても、船首を湯殿山に向けたかった、舟を湯殿山に向かうように・進むように置きたかったという明確な意図が浮かび上がる。

<table>
<tr><td>谷側から山側を見るイメージ</td><td>山側から谷側を見るイメージ</td></tr>
<tr><td>仮説；刻字面を谷側に配置</td><td>当初配置（刻字面が山側）</td></tr>
<tr><td>船が進む方向</td><td>船が進む方向</td></tr>
<tr><td>湯殿山 | 地点を当てれば | 山形
船首 | 舟を当てれば | 船尾</td><td>山形 | 地点を当てれば | 湯殿山
船尾 | 舟を当てれば | 船首</td></tr>
<tr><td>為六親 眷属有 縁無縁 菩提也 正徳六 丙申年 五月日 施主山 形八日町 住人 丹羽氏 敬白</td><td>為六親 眷属有 縁無縁 菩提也 正徳六 丙申年 五月日 施主山 形八日町 住人 丹羽氏 敬白</td></tr>
<tr><td>終 日本語縦書きの進め方 始
船が湯殿山に向けて進む時、左舷の日本語縦書き進行は船尾から書き始めて船首に至るので異常である。</td><td>終 日本語縦書きの進め方 始
船が湯殿山に向けて進む時、右舷の日本語縦書き進行は船首から書き始めて船尾に至るので正常である。</td></tr>
<tr><td>それでは、日本語縦書きを左から右に進めると次のようになるが？
敬白 丹羽氏 住人 形八日町 施主山 五月日 丙申年 正徳六 菩提也 縁無縁 眷属有 為六親
始 日本語縦書きの進め方 終
船の進む向きと日本語縦書きの向きが逆になって一見正常に見えるが、そもそも縦書きを右に進めること自体が不正常である。
この仮説検討は不正常・不適切</td><td>船首
（湯殿山）
縦書き文章の流れ
左舷
右舷
縦書き文章の流れ
船尾
（山形）</td></tr>
<tr><td>図(表)－14a</td><td>図(表)－14b</td></tr>
</table>

図(表)－14a との係りにおいて、もしも、図(表)－14c のように、左舷において文字を横一列に右方向（船尾）に並べて行くのであれば問題はない。ただし、**長さを単純に３倍**のものにすれば可能となる。

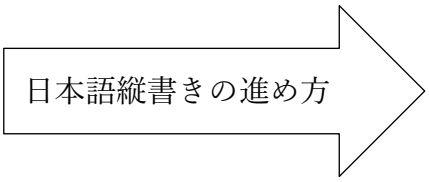
谷側から山側を見るイメージ

仮説；刻字面を谷側に配置



湯殿山	地点を当てれば	山形
船首	舟を当てれば	船尾

為六親眷属有縁無縁菩提也正徳六丙申年五月日施主山形八日町住人双羽氏敬白



図(表)－14c

以上のことから船首を湯殿山に向けて、舟が湯殿山を目指して進むように、かつ、水が出る所で、かつ水を受ける位置に置くとすれば、かつ運搬可能な大きさ等の諸要件を模索すれば、当地においては、刻字面を山側に向けざるを得なかったということであろう。

（３）湯殿山御宝前の特徴を改めて簡潔に整理する。社殿は無く自然のままの、野生のままむき出しの巨岩にお湯が湧き、50 度前後のお湯が滲み出ている茶色の、赤褐色の半球体赫岩（赤見を帯びた岩）を御神体（御宝前、霊巌、霊崛、宝窟、淫祠）としている。ふくよかな腹と「女人女闕」が一体を成している。この巨岩御神体が金胎両部界大日如来そのものである、万物を生む無量光の大日如来である。大日如来は太陽を神格下化身である。

再掲するが、この地点は天門・北西にはその湯殿山御宝前と、地門・南東の山形城下・住処（八日町）を結ぶ 45 度傾斜角方角の直線上の一点であり、そこに船首を御宝前に向けた舟形水受けを奉納安置したのである。加えると、当該点は本通りと交差する位置としては唯一の場所（位置）なのである。45 度傾斜角を察知したのであろう、当時の人達の視野の広さ、広域視座、俯瞰性、洞察力に驚愕せざるを得ない。

易・陰陽道・風水等において方角は吉凶と強く結び付いていることは衆知のとおりである。一つの方角には陰陽・吉凶の相対(待)両面の性格付けをしており、一概には言えないが、例えば易の方角で「天門」の性格付けは、天に通じる門で、天と地を繋ぐ重要な場所であり、天から降りてくる恵みや天からのメッセージが受け取れる場所とされている。逆に陰陽道では、怨霊や魑魅魍魎などの災いが出入りする方角であるとして、方除け守護を願い寺社が建立された例が数多ある。こうだとしても、湯殿山の方角であり魔除けを託すに相応しいとなる。

天門・神門（北西）と地門・風門（南東）を結ぶ直線軸は、風通しの良い天地の往来を意味し、すなわち陰と陽の交合活動を促し、万物の繁殖・繁栄を約束する呪術軸である。**その軸と本通りが交わる唯一の地点**である。湯殿山御宝前のお湯は塩化物イオンＣｌ－（旧呼称は塩素イオン）を水道水基準値の

40 倍を含有し岩体のあちこちから染み出る状況にあり、当地水の出方は前記のとおりである。温度という点ではお湯が陽で水は陰であるが、塩分有無という点では湯に含む塩水（潮水）は陰でここの真水は陽で逆転する。陰陽相対(待)調和の相を喚起する空間となる。どんな願い事をするにしてもとても縁起の良い場所・方角である。

（４）当地を一つの祈願所に設定したという見方も出来る。本通りにおいて第一遥拝所としては柴燈場（柴明場）を、聖俗結界点としての「元高清水」を第二遥拝所と設定していたであろうと推測している中においては、そこまで行けなかった女性や年配者のためには、遠くから拝むという点では当地は格好の最適地であったはずである。

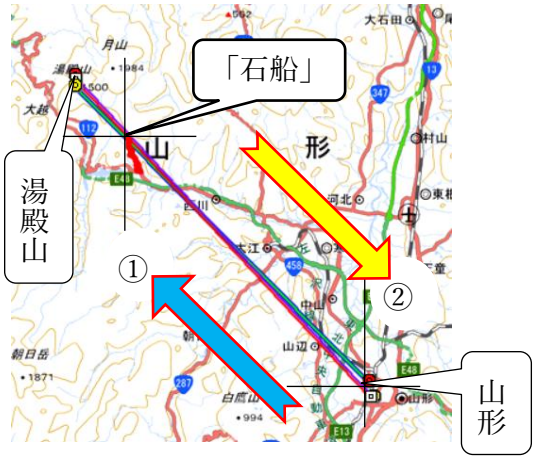
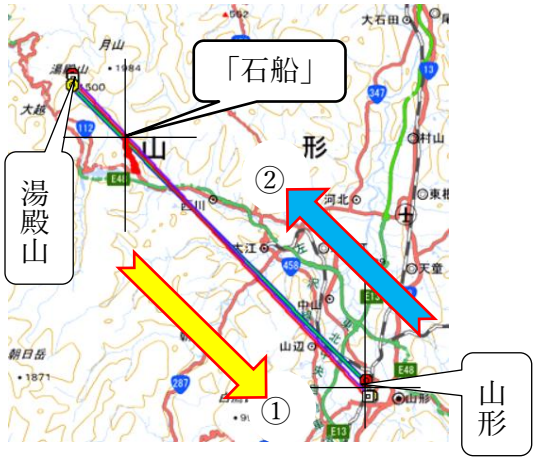
３．新しい向きのこと

刻字を発見した 2023(R5)年 6 月 19 日（月）午後以降は、刻字面を谷側に、つまり、刻字が見えるように、刻字に気付いて貰えるように船首を山形側に向けて再設置している。そうすると、寄進者の意向とは違うことになるではないかという疑義が生じて来る。そこで、新しい解釈を付け加えることにした。

（１）「他力本願」という考え方を取り上げる。この言葉は、一般的には、もっぱら他人の力を当てにする、他人の力に頼る、他人任せにするという意味で使われている。自分自身の努力を放棄し他人依存というイメージの宗教的意味を伴わない文脈で否定的に使う誤用が殆どであるが、これは本来の理解の仕方とは異なっている。浄土真宗の開祖親鸞が明示したと言われるが、原語は浄土教・阿弥陀信仰において使用され仏教用語である。日本で最大の信者数を持つ浄土真宗や、２番目の浄土宗でよく使われる言葉である。詳述は避けるが、日本大百科全書によると、他力とは自己を超えた絶対的な仏の慈悲の力（働き）、本願とは一切衆生の救済を約束する仏の願いを指すという。簡単に言うと、仏様（阿弥陀仏）の私達に向けられた本願（根本的な教え）をそのままにきちんと受け止めて生きること、もっと単純化すると、仏様の本願に身を任せなさい、となる。ここから生身の人間たる他人に寄り掛かるという誤解が生まれたのであるが。

戻って、石船の向きを反対にした理由を次のように解釈することとする。湯殿山に座し万物を生み育み無量光を放つ大日如来の仏光を一心に信じ切ってそのままを受け止めるという姿勢、すなわち“任せる”という姿勢・信心を映したものとする、つまり、大日如来の本願が下降気流に乗って来るので、その教えに包まれるのだという純粋な信仰心の涵養の象徴としての向きである。

（２）もう一つが弥勒菩薩・弥勒信仰と重ねる解釈である。弥勒菩薩については別記することからここでは詳述は避けるが、極簡単に言うと、兜率天で修行中の身分で、仏陀（釈尊）の死から 56 億 7 千万年後にその生れ変りとしてこの世に表れる――下生する未来仏である。また、入定している弘法大師は、その弥勒の下生と共にこの世界に蘇るという遺言を残している。これらに本件を重ねると図－15 のようにイメージになる。以前の向きは上生向き――大日如来と弥勒菩薩の功徳を求めに行く姿勢が先行――としていたが、この度を節目に下生向き――大日如来と弥勒菩薩の功徳に任せる姿勢を先行――として、合わせて以って、往復対話という空間にしたという理解にする。山の神仏（かみ・ほとけ）と里の人間との相互アクセス、人と神仏との感応道交の構図であるが、円滑な往復往来においては、卵と鶏の後先のような問題は惹起しない。

以前（舟が湯殿山を向いていた時）	今（舟は里を向いている）
	
①里の民衆の祈願を熱心に山にお届けすれば、②山は大日如来の本願を以って応現する。	①里の民衆は大日如来の降臨を丸ごと受止め、②崇仏敬神で返す。

図－15

IV部　「舟形・船」

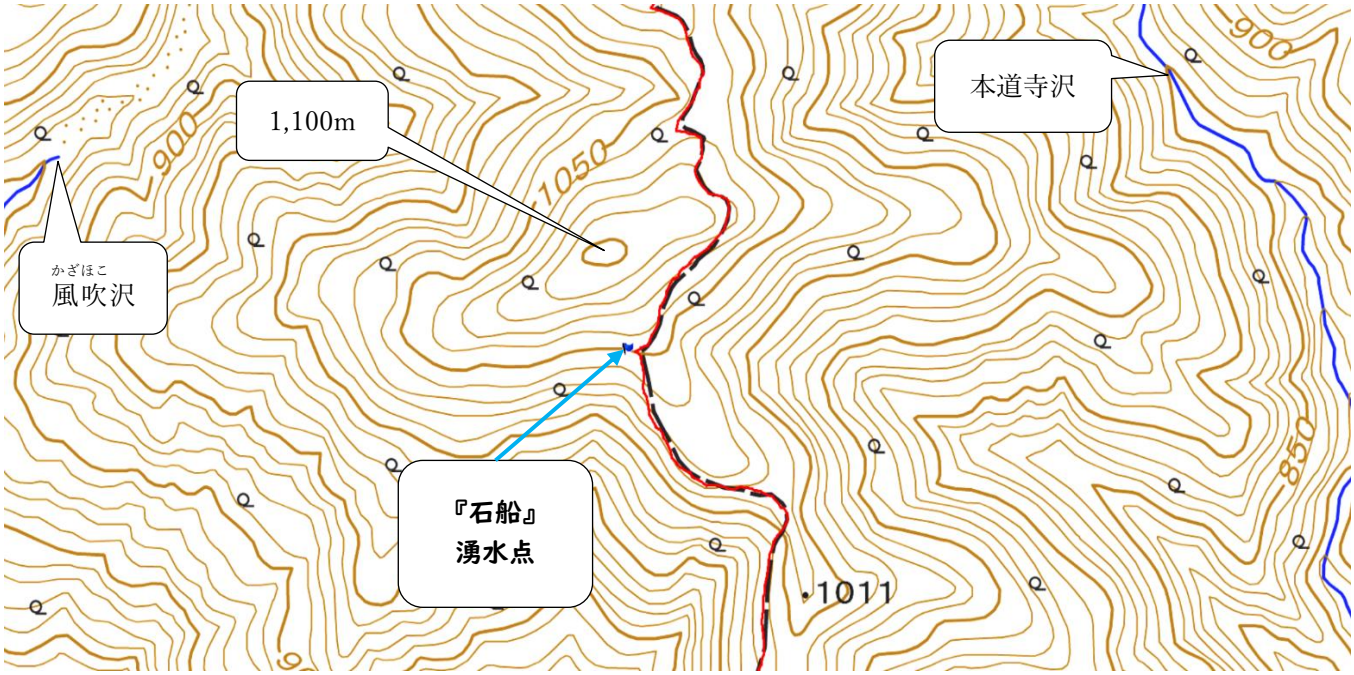
「舟形・船」そのものの根本命題について考察する。

1．この地の湧水原理

（1）伏流水貯水槽

前記、「月山山系から供給されている伏流水」と記述したが、そのことに触れる。ここの湧水点は起点より約 4,853m（理論上 44.5 丁相当 ）、標高は約 1,050m である。前者は月山までの距離 14.3km に対しては 33.9%の所、元高清水（九十六丁）までの約 10.5km（≒96×109）に対しては 46.4%、後者は標高 1,984m に対しては 52.9%である。概算、１／３、１／２という数値である、**元高清水までだけを対象にすると距離・標高共に目安１／２（半分）という数値割合になる、切りがいいではないか。**この湧水の源泉を探るべく周囲を見渡すと地形は図－16 のとおりで、水瓶・貯水槽と成り得るのは北側直上標高 1,100m の小山が考えられる。ただ、前記したとおりのことを観想する場合の古人の直観はそんな小さなことではなく、月山頂上付近の「大雪城（おおゆきじろ）」一帯の万年雪に強く結び付けて想像したと思う。逆に1,100m 小山だけに降った雨雪の浸透水では無（Non）いだろうという考え方である。

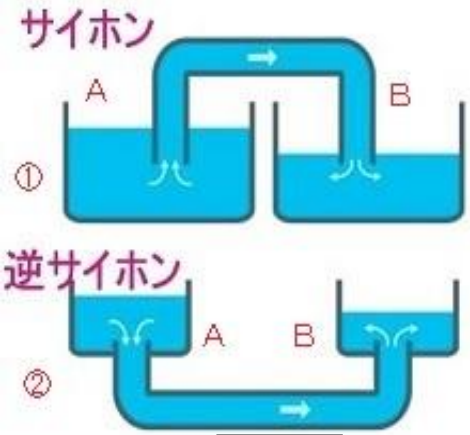
こう言うと、普通は、大方は「大雪城」の水がこんな所に来るはずがないというだろう。しかし、そんなことはない！　「大雪城」は相対的に標高が高くここは低いことから、重力差と気圧差においては流れて来る可能性は有る、また、地下の水脈構造を科学的に解き明かすことは出来ない、つまり、不明であることからにしては、「大雪城」とこの「石船」の水は直結している可能性は十分にあるということである。分らないものの**有無・正否・真偽のいずれかは五分五分である。**ならば、観念的な信仰上においてはなおさらのこと「大雪城」の水が 1,100m の小山を水瓶として貯水している、すなわち、ここを母体胎内に見立てても何ら架空の妄想ではないということになる。



図－16

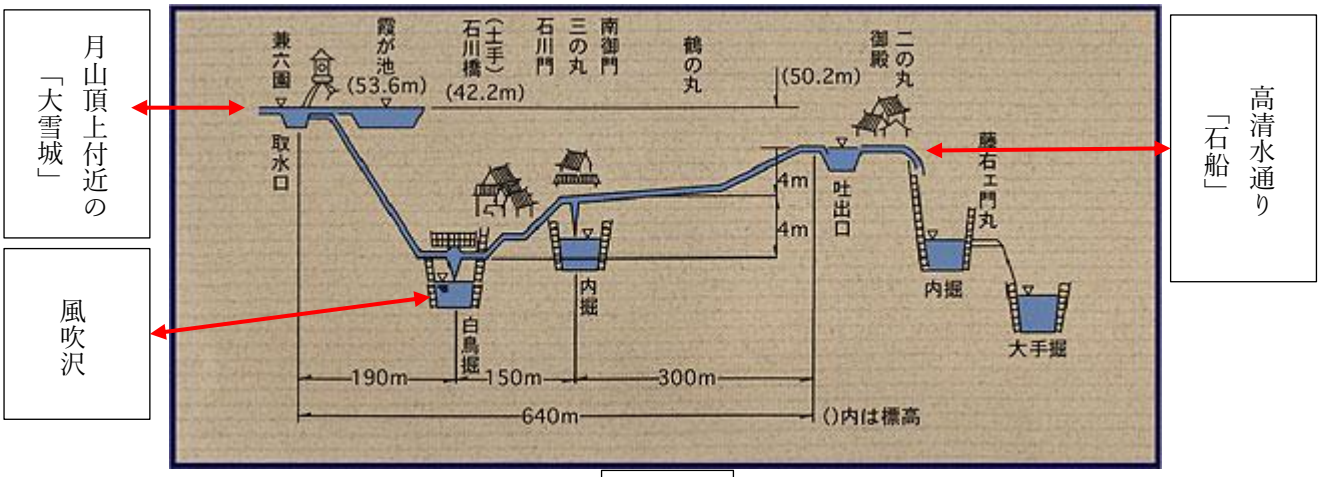
（２）サイホン原理と逆サイホン原理

前記を補強するが次のような自然原理からは、地下水脈さえ繋がっていれば、月山頂上付近「大雪城」と「石船」と結び付けるのはまったく問題は無いということになる。ここではポイントのみを簡単に記述する。株式会社山辰組（岐阜県揖斐郡大野町）のネットサイトをヒントにする。サイホンは図－17①のように吸水地点と吐出地点の間で、吸水地点より高い点があったとしても水は流れる。「逆サイホン」は図－17②のように、吸水地点と吐出地点の間に低い点（限界は無い）があったとしても水は流れる。図－18 は逆サイホンの応用例で、石川県金沢城・兼六園管理事務所の HP より拝借したもの、兼六園から谷間の白鳥掘りを越え、二の丸まで水をあげている状況の説明である。文久元年(1861 年)に作られた「現存する日本最古の噴水」と称されるものである。

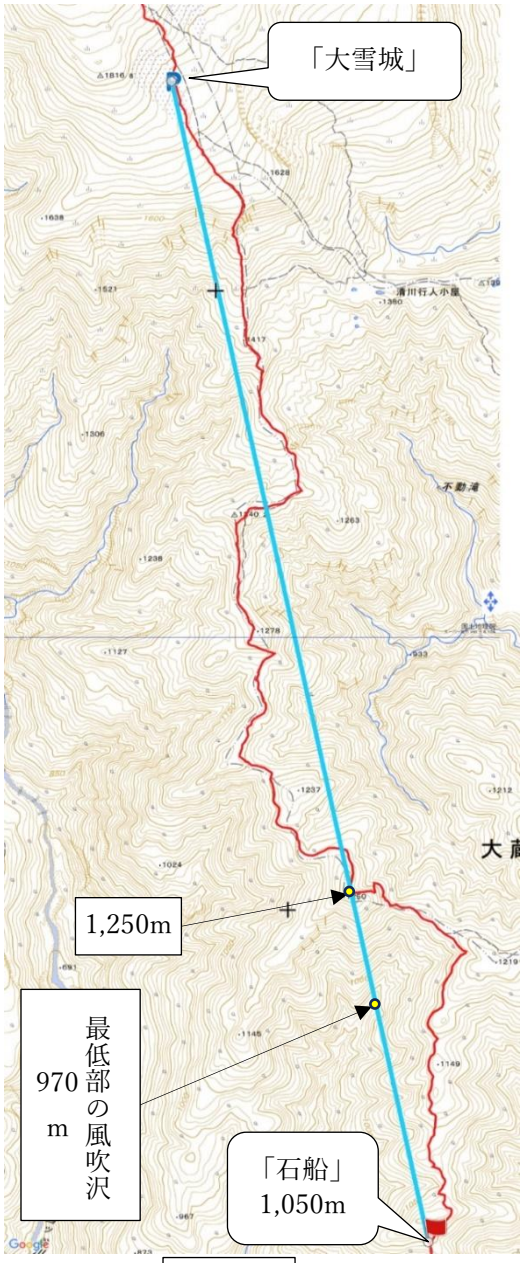


図－17

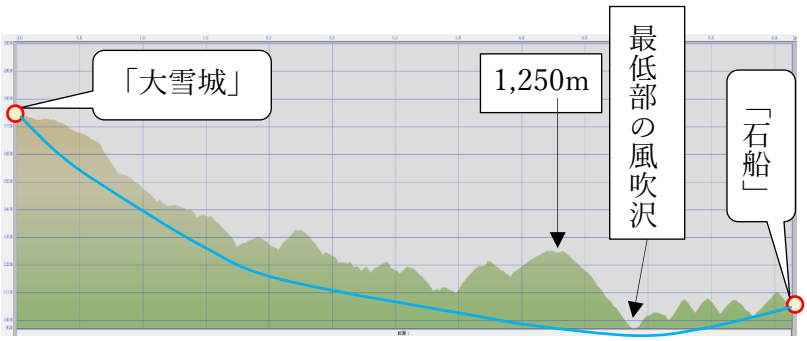
（３）月山伏流水



図－18

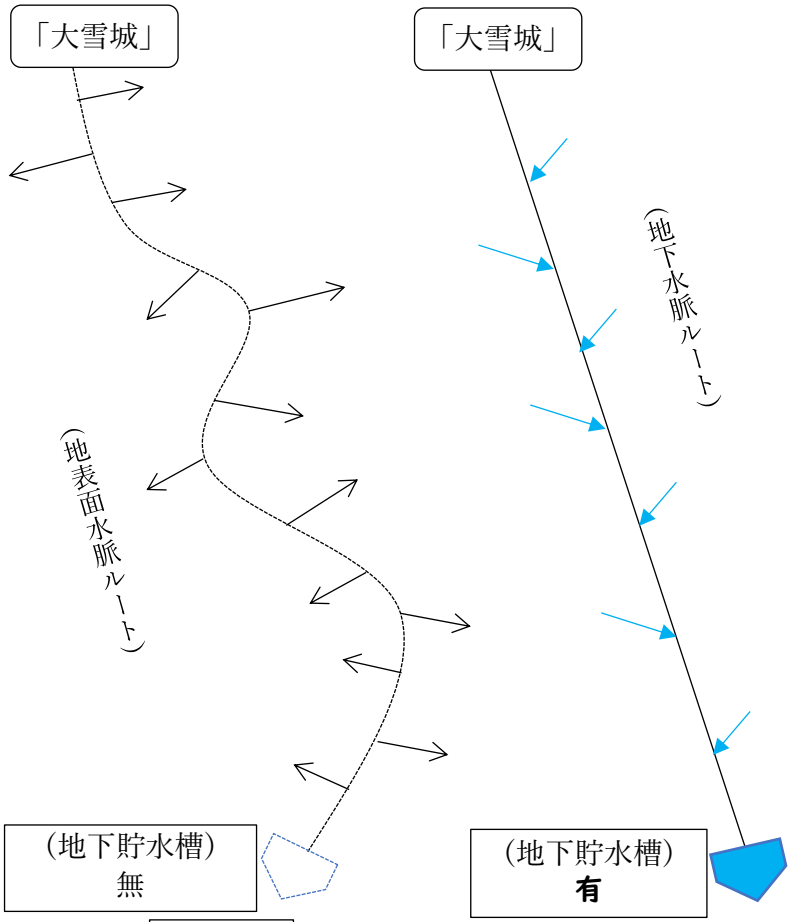


図－19a



図－19b

ちなみに、本通りにおいて「大雪城」と「石船」を直線で結んだ図－19a は平面、図－19b は断面である。



図－20a　　図－20b

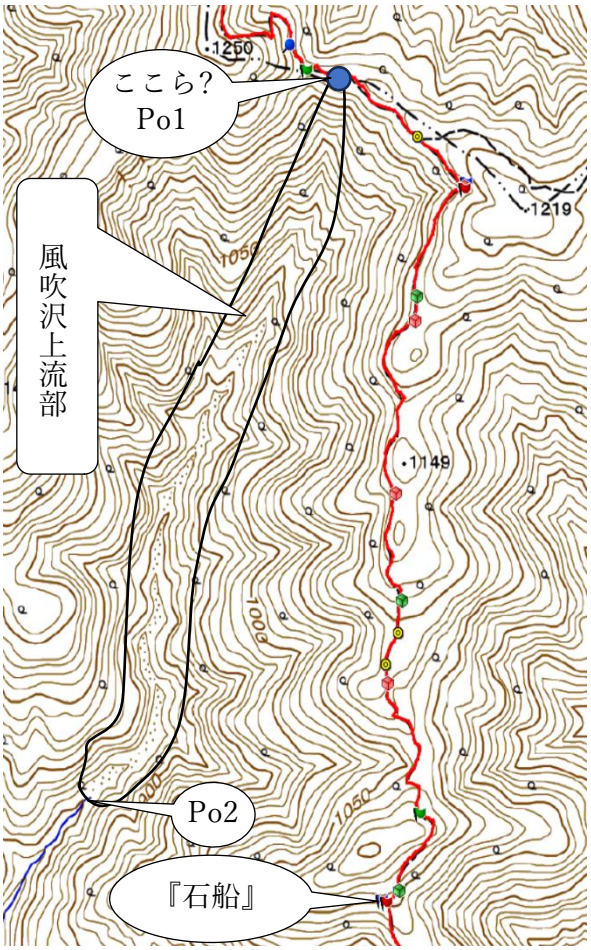
一般的に、図－20a のとおりの本通りは尾根筋地表面に沿う川流れは無い、降雨は左右の沢に流れてしまい尾根筋地中に伏流して流れ来る水脈は無い、よって地下貯水槽は生じることは無いというのが普通の感覚であろう。しかし、図－20b のとおりの直線で結ぶ地下に水脈があると想定――「大雪城」融雪水のみならず途中の浸透水も集めて来るとすれば、まさに本通りに前記図－18（同図にポイントを付加した）の事例がそのまま適用、ぴったり重なるということになる。つまり、貯水槽は「子を宿す腹、子供を産む腹」と成り得るのだ。なお、本通り山道を横切る河川は一個所所もない。つまり、一つの地下水脈を切断する地形には無いということである。勝手な独りよがりの想像かもしれないが、科学的な真偽は誰も断定出来ない、また、昔の人・先人を馬鹿にしてはならない、自然との共生観や信仰心においては遥かに逞（たくま）しい想像力を発揮したことであろう。それを否定するならばそれこそが浅薄で根拠の無い独善というものである。

結論、当地「石船」の水は、広義の月山水である。後記の図－28 にも繋がる。

2．「船ケ沢鉱山（鉛山）」のこと

次に風吹沢上流域で開発された「船ケ沢鉱山（鉛山）」――文化十一（1814）年との関係性有無のことである。西川町史上巻や西川町史編集資料二・五・六号に記述されており、所在地は風吹沢上流で本道寺部落から約 8km の地点は、図－21 の「ここら・Po1」当たりとなる。また、**字船ケ沢**、間ノ神沢という地名があったとされるものの正確な位置は不明である。拡大した図－21b の囲んだ範囲は水流を表示する青色（水色）の書き込みは無く、砂礫上の涸れ川となっている。さて、あったとされる地名「船ケ沢」の由来は何？　と大きな疑問に突き当たる。なお、本通り「ここら・Po1」当たりには鉱山との関係を匂わす・遺すものは、今は何もない。正確な場所や命名の経緯を知る由もないが、二つを想定する。

図－21a



図－21b

1）図－21b の囲んだ範囲内に、初夏の融水後や梅雨期に自然湖が出来たのではなかったのか、そこに船（いかだ）を浮かべて鉱石や薪用木材の運搬に利用したのではないか。

2）逆に、囲んだ範囲は現在同様に涸れ川であって、しかし、「Po2」点に伏流水が湧水し、下流側には普通の川流れが生じ、そこに船を使ったということもあり得る。1）よりもこちらが現実だったのではなかろうか。他の河川、例えば、四ツ谷川や本道寺沢は

滝があって船は使えなかった、しかし、幸いにも風吹沢はそのように河床に大きな段差のある個所はなく、結果して滝は生ぜず船を利用出来た、結果して「船ケ沢」という地名が生まれたのではなかろうか。しかし、ここではたと気が付いた。時代的な後先を考えると、「船ケ沢鉱山」開発は文化十一（1814）年とされていることからは、本件舟形石造物寄進の正徳六（西暦 1716）年よりも 98 年後のことであり、「船ケ沢」の地名は本件「石船」の「船」を取った可能性大である。前記のとおり、「石船」地点の水が（「船ケ沢」の地があったとされる）風吹沢（かざほこ）に流れて行くから。

３．船と女性に係り

（１）「英語圏では船（舟）を女性名詞として扱う。」というが、ネットサイト「旅専 https://www.tabisen.com/gaiyou」より、拝借・引用する。

・・

まず、なぜ、船は彼女（女性）なのか？

船に関する用語でもたびたび女性的な名称が出てきます。ゴッドマーザー（命名者）、処女航海（デビュークルーズ）、姉妹船などなど。その理由については明確な学説もなく、あくまで文法上の慣例と考えるしかありません。

以下は、これまで語られた船はなぜ She なのか？の有力説です。

- 元来、船を操っていたのは男性であり、そのパートナーとしての船を女性にたとえた。
- 周囲には複数の男たちがつきまとい、常時大騒ぎをしているから。
- 見栄えをよくするために多量の化粧（ペンキ）を必要とし、時には全身をきらびやかな装飾で飾りたてるから。
- 下半身を水面下に隠し、上半身をあらわにして、入港するや否や、まっすぐブイ（ボーイ）のもとに駆け込むから。
- その入手費よりも維持費によって人を破局に導くから。

・・

（２）Google ＡＩの Bard を参考

――舟と女性との関係が古くから認められている。例えば、舟のくりぬいた形は子供を宿す胎内と重なる。古代エジプトでは、太陽神ラーの船が女性の姿で描かれている。また、出産する女性を舟に乗せて運び安全に出産出来るようにしていた。さらに、ギリシャ神話では海の女神ネレイデスは、舟を操る姿で描かれている。また、古事記や日本書紀にも女性と舟の結び付ける神話がいくつか登場する。

（３）以上の（１）（２）において、“そもそも、なぜ、船と女性は直結するのか” という問いに適切に答えたものは見当たらない。なお、以下の男女性別記述は、男尊女卑、セクハラ云々で論ずるものではなく、あくまでも陰陽二元の比喩として表現しているものである。

４．舟（ふ）・船（ね）は子孫繁栄・五穀豊穣を象徴

（１）民間信仰の子宝祈願と舟地蔵

ａ．図－23（大沼香が撮影）は某個人の庭園池にある先祖伝来のもので「舟地蔵」と称して、祀って拝んで来たそうである。舟に見立てた三日月状の反った石の凹部に、角張った四角い棒状石柱を突き立て、その上に丸状のごっつい石を乗せ、さらには、棒の根本には三角錐状の石を置いている。これは何

図－23

かを物語っているように見える。その家庭は、なかなか子供に恵まれないことから**子供の誕生を願い**、また、故人・先祖の供養――すなわち、合わせて命のリレーを願い、毎日、この「舟地蔵」を拝んで来たというが、とうとう願いが叶わずに奥様は他界した。

b．これは陰陽和合を暗示したものと直感したが、その理由は次のとおり。縦の石棒は男根、穴と三角の石は女陰、舟は女体、舟が前後左右に揺れる度に、棒が凹部に増々挿入度合を深めて行く場面を重ねたものであろう。「乗るのは男」「乗られるのは女」の具象化の極め付きである。家主はそのとおりとおっしゃられていた。この池には堰から引き込んだ水流れがあり、いわば大河・大海に浮かぶ船を観想しているのである。棒に乗っている丸いごっつい石はお地蔵様とのことだが、実は男の睾丸をも重ねているとのこと。　**これこそが、本件『石船』の舟形の根拠に係る強力な物的証拠、呪術的証拠、信仰的証拠の一つ**となる。

c．また、ある所では、水害から田畑を守り、農作物の豊作を祈願することや、水害で**亡くなった人を供養する**ために、「舟に地蔵を乗せた形」のものを作って祀っているとも言われている。お盆にあちこちで行う舟に乗せた精霊流しの行事と同じ意味合いであろう。

d．要するにこれらは、陰陽（雄雌（おすめす）、雄花雌花）和合による五穀豊穣を、死者供養はひいては子孫繁栄の祈りを込めた命のリレーへの思いであり、それらを形に比喩表現・具象化したものなのである。このような動機の真相は、水と舟（ふ）・船（ね）の強い親和性という抽象観よりも、より具体的なイメージを以って人間の凹凸生殖行為の動きを形にする時、舟の形と船の縦横揺れを類推・想像出来たからだろう。逆に「舟の形と船の揺れ」は「生殖行為と酷似」、前後両者に共通する因子は『水』（露（つ）・液（ゆ））である、それらの連関想像、敷衍化は子孫繁栄、五穀豊穣への祈りとなるのだ。

（2）「石船」意味深の根拠事情

往時の目線を想像しながら係る呼称付けの経緯（いきさつ）を考えて見た。この水場に入り、途切れること無く、どことなく一帯から染み出て来る水を見ていると、それが小川に注ぎ、どこかしこの川と一緒になって、やがては大河に、運ばれた山の栄養素はやがては大海に注ぎ魚介類を育てることに貢献するだろう、そして、船の運航を想像するのはとても自然なことである。また、この水が田畑を潤す農業用水となり、飲用・調理等の生活用水に供するという連想も自然である。ここに「人と水と舟（ふ）・船（ね）」の結び付きを強く感得する。

（当時にワープした気分で列挙する。）

a．第一要因は現地の地理的状況にある、斜面一帯のあちこちから弾ける水玉状は沢山の**あかちゃんが生まれて来るような直感が湧く。**

b．水と女性の親和性がとても高い。水は、植物、動物、人間の命に不可欠なものであり、いわば全有機物の生命維持装置だが、その上で、人間営みの中で最も崇高な事象といえば命の誕生である。その命、胎児は母親の体液（子宮内羊水）の中で育む。単純に言えば、0.25%程度の塩分を含む生理塩水の中でこその命の鼓動である。

c．男女の男精(おとこづゆ)と女卵(おんなつゆ)の交感交合が生命悠久を保障する。水は生命誕生、その後の生命維持の不可欠要素である。つまり、**命を具象化・現実化出来るのは女性（あるいは一般生物にあっては雌）である。対比する男性はそれ相応必須の役割を担うが、ある面トリガー役に過ぎず、究極は女性の成せる技**、神懸かりの主(しゅ)なのだ。それらに重要な接着剤・仲介役は体液――水である露(つ)・液(ゆ)（男精(おとこづゆ)と女卵(おんなつゆ)）である。

d．露(つ)・液(ゆ)の細胞は真水（陽性）と潮水（陰性）の二つ。体液・羊水・生理塩水の性質を分解整理すると真水と潮水（潮水）であり、いわば体液を存在たらしめる細胞の２分子である。

e．「舟・船は乗り物」ですから、ジェンダー視点から言えば、「乗る男」に「乗られる女」の陰陽はすなわち男女・雄雌の合体こそが生物の生命起源の初動である。合体という単純な姿形は、陰陽二元の雌雄・凹凸を上下（下上）に合わせることである。

f．真水と潮水にジェンダー性を当てると、前者は陽の男、後者は陰の女となる。元を質(ただ)せば水源地は、混沌・未開・未発の全一(ぜんいつ)の地、すなわち、何もかもを統合した理想郷模写の地点（母体の胎内）に重なる。

g．「噴き出した液（真水）を受ける」ものとしての水受け舟だから、飛び込んで来た陽は男（凸）を待ち受ける陰は女（凹）との一体性が成立する。

h．石を冠(かん)した理由については、木は長持ちしない、銅等の金属は高価となれば石材というのは自然のこと。そのような単純な他に裏に潜む力に着目した、日本における火打石は古くは『古事記』に登場するように、**石は水と対比される火の種を持っている**。陰陽二元の調和ということをとても大事にする我が民族の心を映したものである。

i．「有源(ゆうげん)の井水(せいすい)」的存在の月山伏流水貯水槽に相応しい名称付けを想像した場合、そこに、ありきたりの円筒形・四角型の水受けではなく、水の源に感謝・尊崇の念を集中し、以上のことを含めて舟状の水受けをわざわざ作造し設置し、水源地の水神様が座(おわ)す地に見立てて崇め祀った。

j．往古より聖地「旧跡神体明鏡」の地と目されて来た元高清水まで九十六丁（約 10.5km）ある中で、そのほぼ中間約 5(4.9)km にある水場であることを人体に重ねると、「中間と水」というキーワードからは、首下においての中間より少し下がった所は性器位置と重なる。

以上のこれらは、言うに及ばず相対(待)性陰陽二元のバランスを意図したものであろう、これらが複合的に頭の中にあった誰かが直感的に「石船」が浮かんだことなのだろう。

（３）真水と潮水

「神道の神秘」（山蔭基央著）の本の中に「川は淡水（真水）で男性象徴であり、海は海水で女性象徴である。その二つが交わる河口は、男女交合のシンボルである」と記載（前後のストーリーから記紀にあるのか。元々は母胎の子宮内羊水は生理塩水である。）の中で育む。単純に言えば、0.25%程度の塩分を含む生理塩水の中でこその命の鼓動である。）されている。それに合致する現実の事象がある。図－24 は大沼が１回目四国へんろ（2015・H27 年）時に撮った高知県土佐清水地内での写真である、右側から川（真水）が流れ来て、左側の太平洋に刺さって行く状況がよく表れている。真水が海水に食い込んで海水（潮水）が窪んでいる。河口に表れた真水（男、男根似）と海水（女、女陰似）の交合合体

図－24

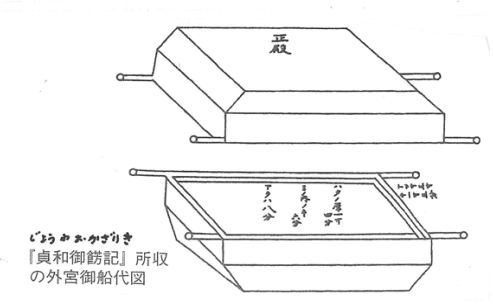
の象徴美である。海側から押し寄せた波と川水との食い合い・鬩ぎあいが見事であった、潜ったり挟んだり５分間見取れた。

（４）最適な交通手段

昔の人や物の移動や運搬手段を考えると、現代の様な動力源を使った車や飛行機や高速船はなかった、その中で最速、最適な交通手段は自然の風を利用した舟であった、物量に応じて大きさを加減出来、細い中小河川に浮かべて上流・山中深く入り込むことが出来、大海原に漕ぎ出しては、広大な経済圏形成発展に大いに貢献する交通手段であった。真水と潮水の双方に抜群の相性を発揮するのが乗り物としての舟・船である。伴う人の交流は情報伝達や文化の伝搬拡散に多大な有益性を齎した。そのような人的・経済活動は繰り返すが、人間の生命循環、五穀豊穣そのものである、そのように思うのは今昔変わらない。どこか遠いところに行きたいとする夢を乗せるものとして舟を観想したことであろう。

５．伊勢神宮御神体との係り

唐突ではあるあるが、伊勢神宮の最も重要な祭祀である式年遷宮に触れる。二十年に一度、社殿と神宝を新調して大御神にお遷り願う神宮最大の神事である。御神体――天照大御神の「御霊代（みたましろ）」である「八咫」の鏡――を新しい社殿に移す際に「御船代（みふなしろ）」という船形の器を以って行う。図－25（https://yamataikokunokai.com/katudou/kiroku330.htm）のようなものである。なぜ、「船」なのか、諸説あってその明確な根拠は見当たらないが、神様と船との関係については、「古事記」の一説を國學院大學神名データーベースから拝借する、大国主神と協力して国造りを行う少彦名命（すくなびこなのみこと）の出雲への渡来の状況についての段において、・・・大国主神、出雲の御大之御前（みほのみさき）に坐す時に、波の穂より、天の羅摩（かがみ）の船に乗りて、鷦（さざき）の皮を内剥ぎに剥ぎ衣服と為て、帰り来る神有り。（大国主神が出雲の御大の岬に居たとき、この神が、波頭から天の羅摩（かがみ。カガイモの実をくり抜いて作った船）の船に乗り、鵝を丸剥ぎにした皮を着てやって来た。）　それではカガイモとはどんな物なのか、風に乗って♪（https://blog.goo.ne.jp/fuyu325）のブログより図－26に拝借する。“種自体にも小さな翼が付いているし、ペラペラで、風でよく舞いそうな形をしています。”という。



図－25

図－26

実の形からは、種を刳り抜くとまさしく船になるではないか。人が乗るほどの大きさに成り得ないと思うが、神話の世界であるから、天の羅摩（かがみ。カガイモ）と「天の」であるから神様にならば、小さな船であっても乗れたのではないか。あるいは、実際にあったとすれば、気を刳り抜いてカガイモ類似の形にしたということだろうか。さらには、“種自体にも小さな翼が付いており風でよく舞いそう”ということからは、船は帆を上げて風の力で、風に乗って海面を滑るように移動することからは、幸せを運ぶ縁起の良いものと想うのは当然のことであろう。

このようなことから船は神様が乗る特別な乗り物という思想となり、一つの要因として伊勢神宮における「御船代（みふなしろ）」に繋がったのだろうと想像している。そこで、これらの思想も相まって、ここ高清水通りの「石船」設置の背景要因の一つに結び付いたということだと考えている。寄進者はこのことが頭の隅にあったのではないか。

Ｖ部　まとめ

１．前後の時代

本件に係る歴史上の出来事について、図(表)－27 のとおり前後のいくつかを取り上げる。　なお、年数差は 2023(令和５)年を基準とした。

和暦年	西暦年	できごと	年差
慶長十六	1611 年	烏川（からすがわ）流域永松鉱山開発	－412
寛永十六	1639 年	「両造法」論争開始	－384
天和二	1682 年	烏川（からすがわ）流域幸生鉱山開発	－341
天和三	1683 年	古来の[高清水]は『旧跡神躰明鏡』の地と表現 「高清水小屋」掛けが登場 地元派と宝蔵院派との内部対立発覚	－340
正徳二	1712 年	本道寺六坊残らず、並に弥陀堂・拝殿と合計拾八軒焼失	－311
正徳三	1713 年	一月十八日、最上出羽守（でわのかみ）（義光（よしあき））の百年忌に付き、旧本道寺は二晩三日の法要斎行	－310
正徳六	1716 年	水場に舟形水受け石造物を設置（山形八日町の人が寄進） **“あえてこの年に奉納”**	－307
享保六	1721 年	梅本坊が姥像等石碑群内に「祖母神」像を建立（米沢城下大福が寄進）	－302
文化十一	1814 年	風吹沢（かざほこ）上流域「船ケ沢鉱山」開発	－209
文政五	1822 年	九十六丁起点記念碑を建立	－201

図(表)－27

２．原点回帰と再考

（１）寄進した人の身分や目的を探りたく基本的な事柄を再考察する。

「石船」の地は住処の屋敷ではない、本通りは単なるピークハント登山の山道でない。先祖神と阿弥陀如来の座(おわ)す月山と、最も神聖な御宝前を有する湯殿山を目指す参詣道である。行者は「**中道正観(しょうかん)（清浄）**」を行ずるために白衣を纏い真剣な気持ちで立ち入っていった聖域である。その山中にミスマッチとも思えるある種異様な舟形の物（水受け）を寄進（設置）したというのである。そして、そのものに託すメッセージを「為六親眷属[※５]　有縁無縁[４]　菩提也[３]」の 12 文字に凝縮して込めたのである。その文字の趣旨からして当然、入魂の儀・開眼供養の儀式を執り行ったことだろう。そのようなものを石工に発注し、重いものをわざわざここまで運んだのである。　　（※）「５－４－３」はピタゴラス数と一致する。

そもそも、寄進したいというのならば、**水受けでなくても弘法大師像でも良かったはずである**。水受けにするというならば舟形でなくても四角形でも丸型も良かったはずである。場所についても、ここまでに至る間に年中枯渇しない湧水地としては、10 丁近辺、水場の「夫婦清水(みよとしず)」、姥像等石碑群近傍の姥小屋跡地にも円形状水溜池が確認されている。あるいは、ここより月山側に至り今でいう「高清水」も水の染み出る所がある。この地でなくても良かったはずである。

しかし、**像ではなく水受けを、丸・四角ではなく舟形（楕円形状）を、他の水場でなくこの地を、それぞれ意図的に選定した**のである。繰り返すが、**水場といえども、水量豊富に流れ出るという所では無いのだ、そこに舟である。どう見ても「船を浮かべる、浮かんだ船」を観想出来る場所・地勢ではない(Non)。しかし、舟なのだ。**　この本通り当該地は修験道思想が展開する領域・参詣道において、枯渇しない水が染み出す特異なこの地点に着目した寄進者は崇高な思いを傾けた、託したはず。綿密な思慮・企図の上で最も相応しい場所に、最も相応しい形と時期を探り、意図して決定したということだろう。

（２）再確認するが、**当地「石船」の水は月山の水**である。月山水瓶の象徴「大雪城」から浸み込んだ地下水、雨水を受止めた山毛欅(ぶな)が地下に浸透させた水が、当地の地下水槽に溜まった水である。ここに降った雨がたまたま残っていたから染み出たのではない、ここに五行の「木気」（山毛欅(ぶな)）も登場する。

（３）万事・万象は、「天地人」三才の相対(待)活動の交合調和、円満な運行にあり、**その象徴は対極的・両極的な「火と水」**である、特徴を端的に表せば図(表)－28 のとおりとなる。「何事も過ぎたるは及ばざるが如し」で、火と水の暴走を抑止するためには金を呼び込む必要がある。そもそも金気の金の語意は「禁」から来ており殺気・抑制を意味する、また、言うまでもなく「固い物」「光り輝く金銀財宝」を象徴する。もちろん、本通りのことを語っていることからは湯殿山の金気は鉱石に繋がる赤茶けたご神体の岩体である。また、本通り両側河川に埋蔵していた鉱石（金属）鉱山が絡んでいるからである。

火（陽）[天]	[人]	水（陰）[地]
太陽（日）・天空に照応する。 有機物・無機物の全てを消滅出来る。 いわば「全否定」を想起・印象付ける。 上昇垂直指向。 全てのものを死（ころし）す。 男（凸部）に擬人化する。	金気（堅固な制御因子）	太陰（月）・大地に照応する。 有機物・無機物の全ての要求に応じる。 いわば「全肯定」を想起・印象付ける。 下降水平指向。 全てのものを生（うせい）む。 女（凹部）に擬人化する。

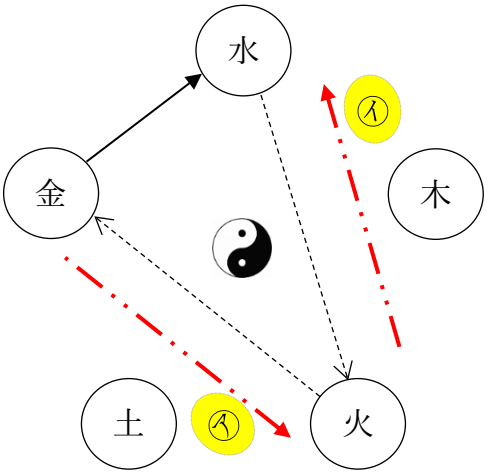
・双方は、時に対立し、時に求め合う、密接不可分の関係がある、そこに永遠の固定は無い、究極の柔軟性を象徴する元素である。

・天地人の調和は弘法大師の「金胎（こんたい）両部界」、「中道正観（しょうかん）（清浄）行」の教えそのものである。

火と水が合体調和で「神（火水（か・み））」が生まれ、輝き（金）を増す。

図(表)－28

（４）図－29 のとおり、金は順当に「金生水」で水を生み、その水で「水剋火」で火を抑制する。他方、金は裏技を駆使し「金剋火（㋐）」で、金属の壁を以って火の燃え盛りを防ぎ、さらには裏技「火剋水（㋑）」を以って火は水を蒸発させて水の暴れを防ぐという呪術力を持ち、これを期待したはずである。金気はいわばステルスプレーヤー（黒子役の制御因子）なのである。陰陽は「陽中陰有、陰中陽有」が大原則であり、両面の視点が常に必要となる。



図－29

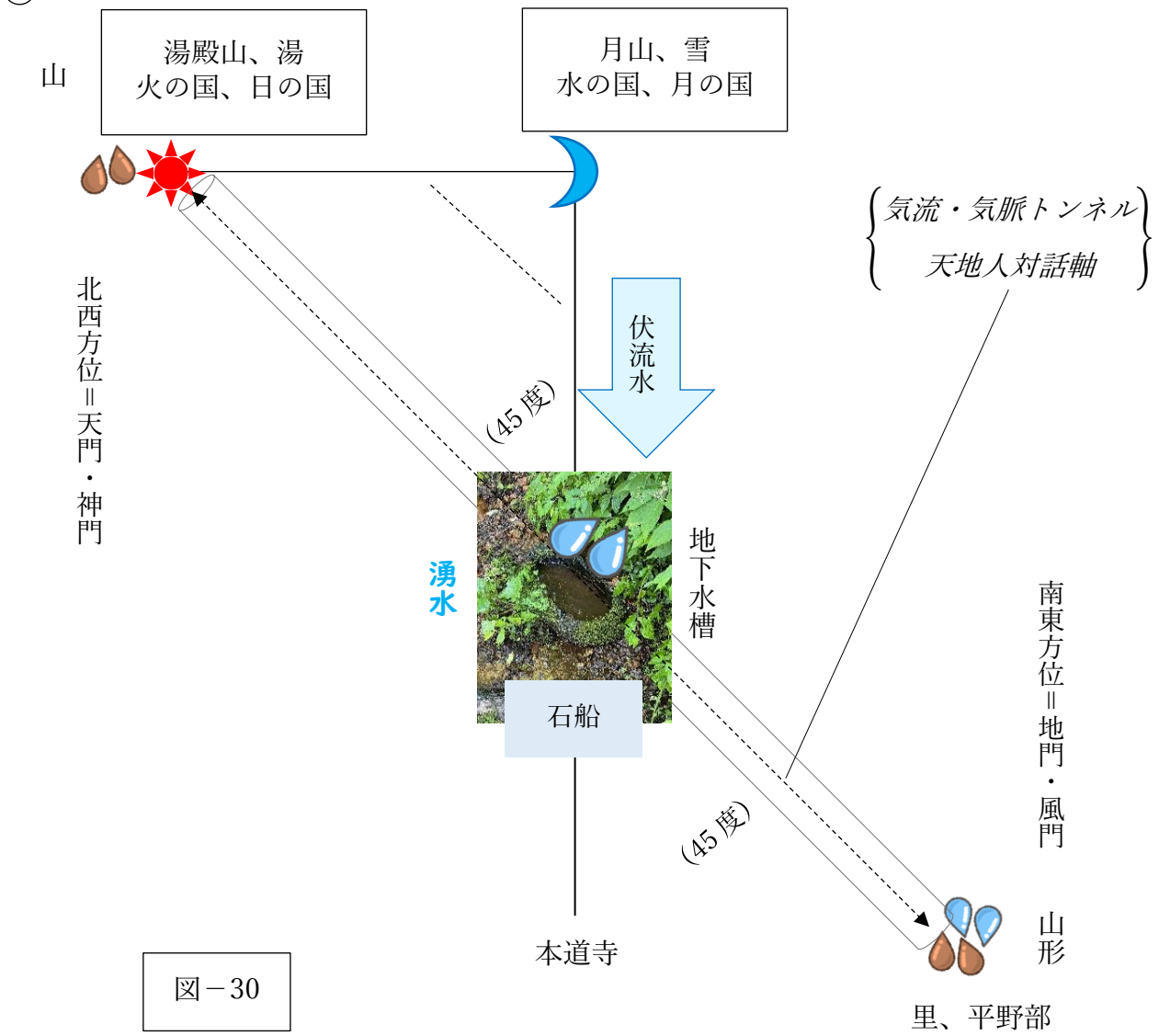
（５）ここに必然的に登場した三つの重要キーワード「火と水と金」は、前記のとおりの陰陽を象徴付ける二大要素「火と水」を踏まえたものであり、本通りに重ねて図－30 のとおりが浮かんで来る。方や神門、方や風門である、往時の人々は崇仏敬神を以って、山の湯殿山と里・平野部の山形を結ぶ 45 度傾斜角風通しトンネル（想像）に舟・船を入れて、人々（諸人）の願いを乗せて往復スライダーしている状況を観想したことであろう。

（６）以上を以ってあらためて、この三つ「金（金属・鉱石）と火と水」に格別の関心を寄せる生業は何かということについてである。

①身近な処では鍛冶職人（鍛冶屋・鍛冶師）である。
②そして、本通りと鉱山開発の係りでは山師（鉱山師）である。
③参詣道という特殊環境に鑑みては修験者（先達）である。
を想起する。

なお、当時の山形における「火」を扱う職人は馬見ヶ崎川の北に移動させられたことから、八日町には鍛冶職人は住めなかったはずという見方もある。だとすれば、八日町に住む（鍛冶職人の）親族が代行・代替したというのであれば可能性十分有りということではないか。

山形八日町住人の丹羽という人は、湯殿山御宝前向けを船首とする舟形石造物の（水受け）を、両者を結ぶ直線軸と本通りが交差する唯一の当地に奉納した。その傾きはほぼ 45 度の開きを持っている。



図－30

職業という点では、漁業・船運関係者や、神職・僧職、はたまた異色の俳人・歌人、その他、ありとあらゆる職種の可能性は有るが、るる記述しているとおりの本通りのこの地点の特性に鑑みては、三世（過去・現在・未来）を貫く事象の真偽のほどは五分五分においては、これらの有意的確立は 49%、①・②・③の確率は 51%と見る。古来、修験者（先達等）と山師（鉱山師）の結び付きについては知る人ぞ知る、である、**六十里越街道山形側起点八日町は湯殿山行き行者出立の基点（定宿地）でもあったこと、参詣道や鉱山開発の歴史を踏まえると、先達か山師（鉱山師）のいずれか、特徴付けの点では「山師（鉱山師・里先達）」と想定するものである。** なお、先達としては里先達でも山先達でもどっちも有り得る。ただし、住処は八日町であるからには里先達の可能性大である、参詣道に立入って行者誘導は出来ないが――山道誘導の任務は山先達――行者に同行するのが立前であった。いわば山道では山先達は運転手、里先達は車掌というべき立場（役割）だったことでだろか。

（7）また、当地はそのような交差点であることは見逃せない。クロスに何かが芽生えるのだ。Crossing に万事・万象が萌芽するのである。ここでいう交差点の意味合いは、対極・両極する陰陽相対(待)二元の出会い・対峙・交錯・鎖交する点であるから、交差点は集合の視点からは万事凝縮のゼロポイント、発散の視点からは新創造基点、万象萌芽原点となるのである。前者を敷衍化すれば「中道正観・清浄行」を誘起し、後者を敷衍化すれば生命起源聖地・再生復活祈願所と想起する。

３．全部纏めて

（１）纏めの前段

纏めに当って、もう一つを付け加えておかなければならないことがある。寄進者の心の無意識層――阿頼耶識（宇宙万有の展開の根源とされる心の主体）の中で疼いている種子の一つが浮かんで来た。数え 24 歳の青年空海は、その思索を「三教指帰（さんごうしいき）」に著したがその中の一説である。加藤精一・加藤純隆著「空海　三教指帰」（角川ソフィア文庫）を参考に空海の弁を簡単に要約する。

―・・人間の生きる娑婆界を「生死海（しょうじかい）」と称し、そこを乗り切るために「離欲号」とか「慈悲丸」では無惨に滅んでしまう。（そんなものでは生ぬるい。）彼岸に至るための六つの行い「六波羅蜜」（生身の人間ながらにして仏様に至らんとする六つの修行）という**筏（いかだ）**を整備して出発しよう。あるいは、「八正道」という**大船**に乗って船出しよう。精進という帆柱（ 橦（ほばしら） ）を立て、禅定（修行）という颯（ほ）をあげて進もう。・・―

この生身の欲深き人間が生きる喜怒哀楽・悲喜交々の五濁（ごじょく）悪世の現実社会を**「海」に譬えて、そして、脱するための手段について「船」を以って譬えている**のである。

他の乗り物ではないのだ。いくら、海・河川での水上交通機関にせよ、当時の陸上交通機関としての荷車やリヤカーではないのだ。あるいは、別の物の喩えもあったはずだが、「船」なのである。これは前述のとおりに生命起源に繋がるものであろう。ここ高清水通りは繰り返し記述するとおりに空海開基の旧本道寺を出立し、空海開基の湯殿山をひたすら求める参詣道であり、その空海はすなわち弘法大師、すなわち仏陀の未来仏弥勒菩薩と同相同義、行者はその霊気と一体感を感得出来る特別な聖地道として分け入って来たのであろう。いわば本通りは空海気流円管ゾーンの中を貫通しているのである。この通りと、湯殿山御宝前と山形を結ぶ 45 度傾斜軸との唯一の交差個所であるこの地点に「船」を置いて、精神を空海はすなわち大日如来（ここでは御宝前）に向進せんとし、対話せんとし菩提心発起（利他性醸成・自己革新決意）の祈りの舞台にした、つまり、再生復活祈願所と見做したことであろうと確信するものである。

寄進者はそのような思想の覚醒を湯殿山に向けた船に託した、こういうことを企図したということだと想像する。だとすれば、「船」の由来の根本起因であるかもしれない。

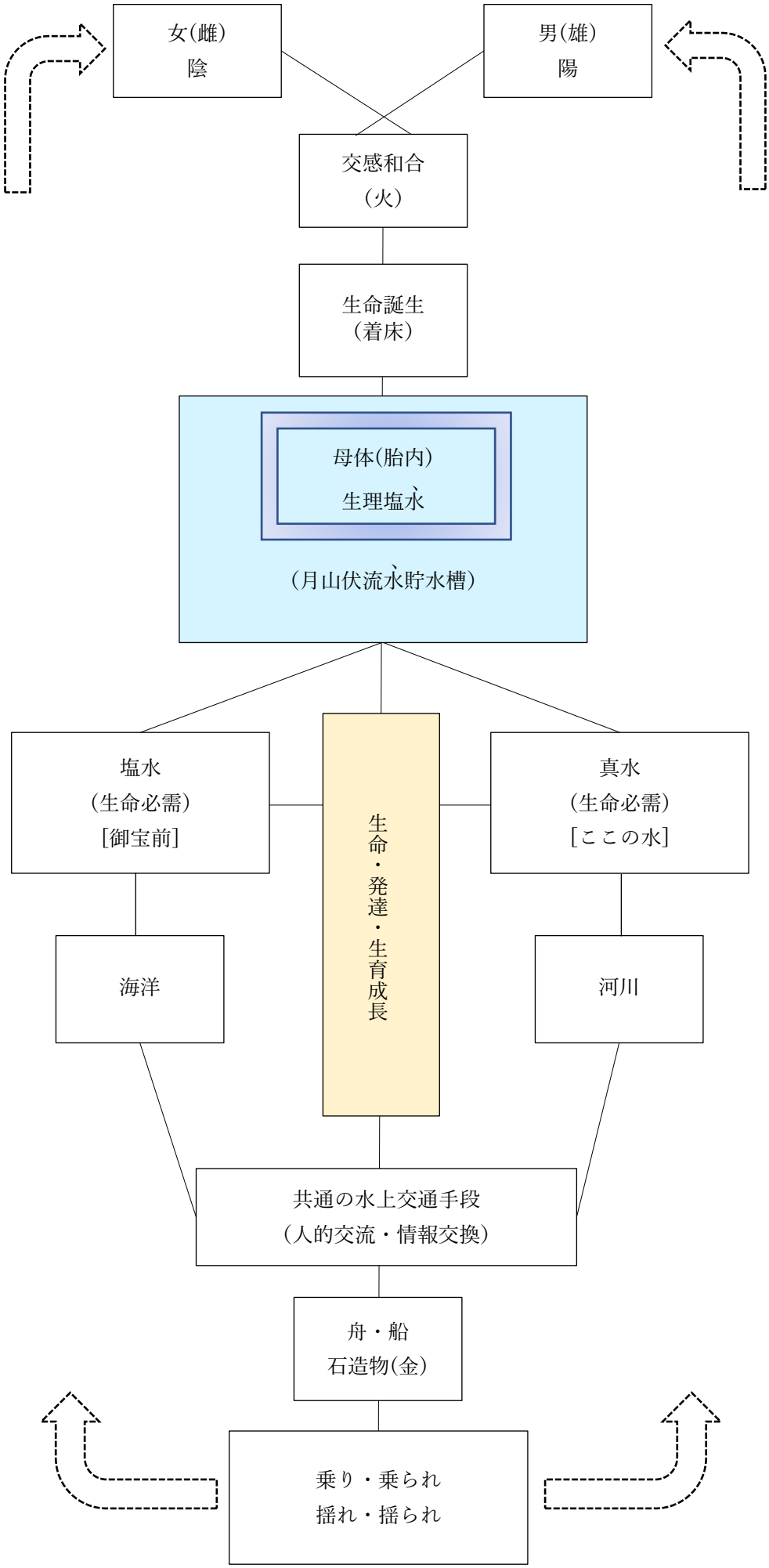
（２）纏めの後段

図(表)－31 のとおりである。本通り沿い他の石碑・石塔・墓石類との大きな違いがあり、他のものの刻字された銘文（碑文）はいわゆる住所・氏名・年号だけであるが、この「石船」には、祈りのメッセージ「(※) 為六親眷属　有縁無縁　菩提也」という利他性文章を刻していることに注目する。

（※）直接的には、全ての親族縁者や家来、ならびに縁の有る無しに係らず故人みんなの霊魂が「悟り」を得られ成仏出来るように冥福を祈る表現だろうが、個人の成仏を祈る・弔う・供養するということは自らに返って、新しい生命誕生、子孫繁栄を祈念するに等しい行いであろう。

同表のとおりに、纏めるに当って、前提とする考え方があり、万事・万象を育む「天地人」三才の円満な運行は、陰陽五行相対(待)活動交合調和の中で、本件に関しては「火と水と金」（気）が重要ファクターである、と認識すべしである。

<table>
<tr><td colspan="3">本件３命題解読のキータームは「天地人＝天（神（かみ・ほとけ）仏）・地（自然）・人（人の意図）」と陰陽五行中の３要素「火と水と金」である。</td></tr>
<tr><td>命題1</td><td>[水受け寄進者の身分]</td><td>山師（鉱山師・修験者たる里先達）／こちらの可能性大
鍛冶職人（鍛冶屋・鍛冶師）か、その親族（代行・代替か）</td></tr>
<tr><td>命題2</td><td colspan="2">[この場所の設定意図]
山の湯殿山周辺と里の山形八日町（湯殿山参詣宿泊者の定宿に指定）周辺を結ぶと、当地は、北西と南東を結ぶほぼ真正な 45 度傾斜角方向直線上の一点にあることが判明した。天門・神門（北西）と地門・風門（南東）を結ぶこの直線天地軸は、万象の障害無き天地の自由往来を可能ならしめる気が通流する方角、すなわち陰と陽の円満な交合活動を促し、万物の繁殖と万事の繁栄を約束する呪術的軸である。その軸と本通りが交差する唯一の地点がここであることを突き止め、万物を生む大日如来の座（おわ）す御宝前に船首を向けて舟形水受けを置いた。
交差・クロスに何かが芽生える、集合の視点からは万事凝縮のゼロポイント、発散の視点からは新創造基点、万象萌芽原点となるのだ。</td></tr>
<tr><td>命題3</td><td colspan="2">[舟（船）形に託した意図]
舟（ふ）・船（ね）と水と女性の強い親和性に対して、自然界の根本原理「相対(待)性陰陽二元」を以って人間の有り様を観想し、すなわち、先祖供養から子孫繁栄への命のリレーに対する報恩感謝・祈願、ひいては五穀豊穣・商売繁盛・事業繁栄・社会平和の願い・祈りを込め、神仏との感応道交に相応しい象徴として、この湧水地に水受けの舟形石造物を寄進奉納した。
以って、手短に言えば、舟の姿形と運動の様相は、生命誕生活動原初の象徴である――すなわち、「舟・船∴生命誕生」と観念・直観した上で生命起源聖地と見立て祈りの舞台、再生復活祈願所と見立て祭儀の舞台とした、のであろう。
本通り参詣道の最終目的地である湯殿山御宝前「女人女闕（にょけつ）」は、動と静、発と受、陰と陽の具象代表格「火と水」を表裏一体とし、金（赤茶けた岩体、鉱石、金属）を仲立ち(黒子)にして命（火水（かみ）＝神）をうずくのだ。
この命題３の構図を概念図化したのが図－32である。</td></tr>
<tr><td colspan="3">図(表)－31</td></tr>
</table>


女(雌)
陰
男(雄)
陽
交感和合
(火)
生命誕生
(着床)
母体(胎内)
生理塩水
(月山伏流水貯水槽)
塩水
(生命必需)
[御宝前]
生命・発達・生育成長
真水
(生命必需)
[ここの水]
海洋
河川
共通の水上交通手段
(人的交流・情報交換)
舟・船
石造物(金)
乗り・乗られ
揺れ・揺られ

図－32

「石船」の名付けについて、舟形水受けを設置した時に、寄進奉納した「舟形石造物」の石と舟（船）の文字を取って「石船」と命名したのであろう。

・自然なことでこれが名付けの根拠となったものであろう。今となっては、「石船」は道標にあることからこの地点名であり、かつ、水受けの舟形石造物を以って水受け自体の名称でもある。

・なお、風吹(かざほこ)沢上流域「船ケ沢鉱山」の名称の「船」は、時間的経緯からしても――鉱山開発が遅いことからは、上記「石船」の「船」を採用したということであろうと考えている。

VI部　所感

以上の総合見地からは、どんな身分・立場であれ、前頁図－30 に概念図化したとおり、新しい生命誕生（裏返した死者の成仏、あるいは自らの蘇り・再生）への祈りは万人共通の素朴で普遍的な願いであろう。それらの思いを凝縮してこの舟形水受けに込めたということであろう。加えて寄進者の心はもっともっと深い意図を持っていたのかもしれない。「弘法大師像ではなく水受け」だった訳だが、地元からみれば「弘法大師像」であって欲しかった、あるいは、大日如来化身の立派な不動明王像であって欲しかった、と心情的に思だろう。そうなっていれば別の展開になったかもしれない。しかし、舟（船）だったのである。陰陽五行説や易経は、本来（基本）はシンプルであるが、「陰中陽有・陽中陰有」の自然原理を含むことによって輻輳化、多層化している。様々な切り口はあるが、全部を網羅出来るはずはなく、本件の読み解きに適切と思われる視点から書いたものである。

ところで、陰陽五行説や易経を持ち出したのはこじつけではないかという疑義の念が湧くのは当然のことだが、当時の人達を見下してはならない。それらは単なる安直な「うらない」や迷信作りの元（素）ではない。「太一陰陽五行思想」が初めて正式に日本に伝来したのは、継体天皇 7 年癸巳（513 年）の 7 月に百済の五経博士渡来と共に入って来たとされており、日本文化に深く浸透して来たというのは歴史的に周知の事実である。また、本件との係りでは別記したとおり、岩根沢旧日月寺別当職が使った、勉強した易(えき)の本が残されている。

このような不思議なものについて、300 年後の今になって、当時の記録が見当らない以上、どのように解釈すべきなのか、と自問自答している。何の意義付けも無く、このようなものをこの年にここに置くということは人間界では有り得ない。当時の人達の思いに馳せる他はない、想像する他はないことからは、何らかの拠り所を以って考証する他はない、その上で、呪術的信仰心は今以上にすそ野を広げて浸透していたことだろうからその面から説く必要があると考え、浅学菲才の身を以って記述したものである。

冒頭命題の読み解きについては、私は率直に申して、既成概念・既得既存の思惟装置を外せば観えて来る、理解出来ると思っている。弘法大師の教えの原点である「金胎両部界（陰陽）の調和、中道正(しょう)観(かん)」の視座を以って解けるはずと思う。昨今の多様性社会と叫ばれる時代にあっては、“健全な多重人格”が必要とも言われている。つまり、自己隔離ネット包囲リングの内鍵を外せ、精神的型枠を解体せよという訓えでもある。私とて、上記のように書いて見たものの、当時の人達の深い先験的洞察性には到底及ばないと思っている、もっともっと奥深い企図があったのかもしれない。

2022(令和４)年 6 月 26（日）に本通りに立ち入って以来、本件「石船」調査は残されたたった一つの私の最大の懸案であった。周囲の人達からは“何も書かれていないのではないか（書かれている訳がな

い）”と言う意見もあり、これを知ってから約１年近くは放置していた。しかし、とても気になっていた。　そうこうして、**１年経過直前の 2023(令和５)年６月 19 日（月）に刻字を発見し、21（水）にこの舟形水受け石造物「石船」の正体の全容を突き止めたのである。とても、有意義な活動となった。**

Ⅶ部　石船新道開削（修復整備）

前記５頁冒頭に記述したが本通りからこの水受石造物に至る道の整備（道普請）に係り、2023(R5)年７月３日（月）、布施範行・宮林良幸・阿部剛士・大沼香の４名でフォロー実施した。図(表)－33 のとおり、ルート（道筋）は従前どおりであるが、段差を付け、道が崩れないようにしがらみ工夫を施し、水受け手前のぬかるみに柴と土嚢（10 袋）を敷き、水取入口に砂利が入らないように格子状枡を置いて工夫した。新道開削と大げさに書いたが見違えるように整備したということである。

この時、舟形水受けの銘文刻字について、あらためて４名で解読し、先般報告のとおり相違ないことを確認した。

作業前

作業後

図(表)－33a

作業風景の一コマ

図(表)－33b

＜end＞